瀬戸の艦娘

輪音

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは役目を終えた艦娘たちの話

余話

島に暮らす娘たちと

中年男とショタっ子

彼らの交流の話

箱庭の話

小さな島にて

艦娘たちは

余生を生きる

※くノ一は『梅雨』以降に出演します。

目次

終戦 …… 1
流転 …… 22
相撲 …… 32
熱量 …… 40
魔法 …… 51
羅馬 …… 60
御宝 …… 66
猛禽 …… 76
埴丸 …… 82
追儺 …… 87
扇島 …… 99
野草 …… 105
軟骨 …… 110
襟巻 …… 115
舟艇 …… 120
北壁 …… 127
洋琴 …… 132
焼鳥 …… 137
紅茶 …… 142
柏餅 …… 149
蘇芳 …… 158
温室 …… 165
狩猟 …… 170
生鰹 …… 175
梅雨 …… 182

翁飴 192
白桃 197
岩屋 201
蜜柑 208
酒粕 213
抹茶 217
射的 222

終戦

軍の命令により、私たちは呉鎮守府に集められた。
期待と不安。
それらは私たちの顔に描かれているもの。
長きに渡って繰り広げられていた深海棲艦との過酷な戦いはようやく終息を迎え、この二年は一体のイ級すら確認されていない。
鈍重なる大本営と日本政府は非常事態宣言をやっと解除し、愚かな私たち艦娘は素朴な国民たちと共に久々の平和を喜びあった。
腫れ物扱いで、提督ですら触ろうともしない存在。
同情的な提督ですら、精々食べ物を与えるくらい。
女として扱われた艦娘は誰もいない。
物として扱われた艦娘ばかりがいる。
飼い慣らせているかもしれない、猛獣の如き扱いさえ受けた。
恐れられた。

怖がられた。
艦娘が提督を襲った事実など、一度たりとて存在しないのに。
ケッコンカッコカリなどという欺瞞さえ、喜んで受け入れた。
口だけ出して手も出そうとしない指揮官に微笑む鎮守府生活。
世界の海を平和にするため、邁進する。
それこそが彼女たち艦娘の信念で矜持。
鋼鉄の艤装をまとい、笑顔で海域攻略に向かう勇敢な戦乙女。
それが、艦娘。
人ではない娘。

彼女たちは純粋過ぎた。
正直者は損をする、という歴史的な事実さえも知らなかった。
無知で無垢で懸命な彼女たちは、狡猾老練な化け物たちの駒に過ぎなかった。
小さな善意は大きな悪意に塗り潰される。
偽物の錦の御旗を振る者たちに騙される。
真顔で嘘をつく者でないと出世出来ない。
その出世した輩共に艦娘たちは騙された。

騙す気持ちをも騙しぬく者共に騙された。
内心怯え震える者たちが利用し尽くした。
絶頂期を過ぎると後は急転直下。
歴史を活かせない人間同様、彼女たちも巨大な社会を構成するちっぽけな歯車でしかなかった。
いや。
異物として排除される、異形の塊にしか過ぎないのを認識出来たのは既にどうにもならない事態に陥ってからだった。
『統合化』によって、同じ姿をした艦娘はそれぞれ一名ずつに収束され、艦種が変化した者たちは話し合いをしてひとつの結果へと変化した。
そして、『解体』。
艦娘でもなく、人間でもない存在へと彼女たちは変わってしまった。
中途半端な宙ぶらりんの生命体だ。
全員隠し通したために特殊能力があるままだったけれども、信頼出来る提督がいないと異能は使えない。
彼女たちの運命はまさに風前の灯。
愛してくれる殿方さえいるならば。

受け入れてくれる男はいないのか？

私たちは不要品だった。
明日をも知れぬ不用品。
救世主など存在しない。
艤装は既に没収された。
海へ逃げることも不可。
鎮守府は檻に変わった。
提督ももう一人だけだ。
私たちを冷たく見る男。
人ならぬ者ゆえなのか？
泣き喚く者怒り叫ぶ者。
交渉しようと努める者。
すべてが無駄に終わる。
誰か私たちを助けて。
ここから連れ出して。
誰か。

誰か。
答えて。
応えて。
ワタシタチヲタスケテ。
テイトク。
テイトク。
タスケテ。
ワタシタチヲタスケテ。
テイトク。
テイトク。
ワタシタチノテイトク。

戦争が終わって、ほんまめでてえのう。
島暮らしで甥っ子と一緒に芋や葡萄や蜜柑や酒などつくっとったが、行商人の藻国が詳しい話を教えてくれた。
呉鎮守府に、世界を助けてくださったありがたい艦娘たちが集まっているという。
丁度沢山薩摩芋も出来た。蜜柑もある。

持っていったら、喜んでくれるかのう。
薩摩芋と蜜柑を目一杯箱に詰め込んで、ワシはぽんぽん船のエクセリオンに乗って呉を目指した。
瀬戸の海は穏やか。
青い空がどこまでも広がっとる。
その内、漁船が何隻も普通に行き交うようになるじゃろう。
観光船や連絡船も多く行き交う時代になってゆくじゃろう。
平和が一番じゃで。
朝はようから出たんで、昼前には呉鎮守府に着いた。
いつもの軍曹さんがおらんのう。
というか、誰もおりゃあせんが。
でえれえ不用心じゃのう。
あれ？
女学生さんがおるが。
なんでじゃ？
勤労奉仕隊の娘さん？
くれえ顔しとるのう。

まあ、こんなご時世じゃけえ、なんでかは聞かん方がええか。
「のう、女学生さん。ワシ、井東ゆうもんじゃがの、誰か軍人さんはおらんかのう。薩摩芋と蜜柑が沢山出来たけえ、艦娘の皆さんに食べてもらおうと思うて持ってきたんじゃ。」
「……え？　あの、芋とみかんですか？　その、どうしてここへ持ってこられたんですか？」
「おう、お国のために戦ってきた艦娘の皆さんへのねぎらいじゃな。ワシなりの。」
「……ねぎらい、ですか。」
「まあの。前から持ってきたりはしとったんじゃが、いつもは軍曹さんか門番の軍人さんに渡して帰っとったからの。今日はおらんみたいじゃが。」
「……前から持ってきてくださったんですね。」
「そうじゃ。まあ、ワシ程度に出来ることなんぞ、てえしてねえがの。艦娘の皆さんが頑張ってくれたからこそ、日本も世界も平和になったんじゃ。ワシなりのご恩返しかな。自己満足に過ぎんかもしれんが、まあ食べてみられえ。」
「……い、いつも、ありがとうございます。みんな……みんなおいしくいただきました。」
「そうか、そりゃあよかった。ん？　あんた、艦娘かな？」
「は、はい、吹雪型駆逐艦一番艦の吹雪です。……う、うう……。」

「ど、どねえしたんじゃ、吹雪ちゃん。なんでそげに泣いとんじゃ？」
「あんた、吹雪になにをしたのっ!?」
女学生がもう一人現れた。
こっちは気が強そうじゃ。
「へ？　ワシは芋と蜜柑を持ってきただけじゃが。」
「それだけで、吹雪がこんな風になるわけないじゃない！　なにを言ったのっ!?　人間なんて！　人間なんて！　私たちに手のひら返しを！　ここまでやって来てなじるだなんて！　恥を知りなさい！」
「ち、違うの、叢雲ちゃん。私、嬉しくて、嬉しくて、それで泣いたの。」
「ホント？　ホントにそう？」
「うん、こちらの井東のおじ様が、いつもいつもおいしい芋やみかんを持ってきてくれていた人なんだよ。」
「……そうだったの。悪かったわ。」
「気にせんでええで。誤解は誰にでもあるけえの。芋と蜜柑を渡すけえ、みんなで食べてみられえ。じゃあ……。」
「あのう、井東のおじ様。」
「なんじゃ、吹雪ちゃん。」

「そ、そのう、お茶でも飲んでいかれませんか？」
「おお、そりゃ、ありがてえけど……ええんか？」
「吹雪がいいんなら、私から文句は言わないわ。」
「そいじゃあ、これらを先に運んでしまおうか。」
「厨房に持っていきましょう。」
「そうね、手伝うわ。」
厨房には美人のお姉ちゃんがいた。
白い割烹着に大きな胸乳の美女だ。
どことなくぼんやりとして見える。
そろそろ昼飯の準備をせんとおえんのじゃねかろうか？
なにがあったんじゃろか？
料理が上手くいかんかったんじゃろか？
「「間宮さん。」」
女の子たちが美人さんに声をかける。
からくり人形のように首を動かした。
「あら、叢雲ちゃんに吹雪ちゃん。」
なんとはなしにやつれて見えるのう。

でも、なんじゃ？
二人ともおかしいとは思っとらんの？
なして？
そう言えば、二人とも……。
「元気を出して、とはなかなか言えないけどね。今、このおじさんから芋と蜜柑を貰ったのよ。見て。」
「私たちが頑張っているからって、井東のおじ様がわざわざ持ってきてくださったんです！　以前から、時々持ってきてくださっているそうですよ。」
「お芋？　蜜柑？」
じっと野菜と果物を見つめる、間宮さんという女性。
「う……う……。」
さっきの吹雪ちゃん状態じゃ！
どねえすりゃあええんじゃ!?
「お見苦しいところをお見せしました。」
「気にせんでええで。泣ける時に泣くんも大事なことじゃ。」
三人でわたわたしながらも、どうにか間宮さんの気分を落ち着かせる。

なんとかせにゃならんと手を握ったら、何故か彼女の顔が赤くなった。
とんでもないことが発覚する。
国のために奮闘し続けた艦娘たちが、なんとまあこの呉にずっとおらんといけんらしい。
それ、軟禁じゃが！
なんでじゃ!?
もしかしたら、みんないなくなってしまうかもしれんらしいとも聞いた。
はあっ？
訳がわからん！
そこへ、黒い軍服を着た気障ったらしい感じの眼鏡男が入ってきた。
お前か！
お前が提督をやっとんか！
「間宮さん、明日から艦娘の食事を減らす件ですが……げっ！　先輩！　どうしてここにいるんですか!?」
「おう、上がらせてもらっとるぞ、我が後輩。救国の英雄たる艦娘たちの食事を減らすとは、どんな料簡じゃ？」
「えっ、えっ、あの、井東のおじ様と司令官ってお知り合いだったんですか？」

「学生時代からの腐れ縁じゃ。」
「僕の頼れる、素晴らしい先輩です。」
「なんでそげえに、いけしゃあしゃあと真顔で大嘘がつけるんかのう。」
「酷い言い種ですね、先輩。僕はいつだって誠実な人間なんですから。」
「ようゆうわ。」
「折角来られたんです。ちょっとお話しませんか？　執務室で。」
「ワシからは提督様となぞ、特に話すことなどなんも無いのう。」
「先輩、人助けが趣味ですよね。」
「そんな珍しい趣味なんぞ持っとらん。」
「間宮さん、先輩と一緒に執務室まで来てください。吹雪と叢雲は蜜柑を皆に分けてくれ。いいですよね、先輩。」
「人の話を聞かんところは変わらんのう。勿論、その為に持ってきたんじゃ。吹雪ちゃん、叢雲ちゃん、任せたわ。」

渋々後輩についていく。

執務室には、眼鏡をかけたきれいな娘さんがいた。

大淀さんという、事務の処理に長けた艦娘だとか。

こいつは、美人さんたちに囲まれて暮らしとんか。

その美人さんたちをこいつは……。
「今、艦娘たちは危機にあります。」
後輩は眼鏡をぴかぴか光らせながら、話の口火を切った。
「下手をすれば、艦娘全員命を失うでしょう。」
「……ちょっとええか。なんでそげな大事な話を一民間人のワシにする？　それ、軍事機密違うんか？」
「危急存亡の危機なんです。形式に捕らわれていては、本質を見失います。」
「そんで？　日本がダメなら、海外の国に亡命させる手もあるん違うんか？」
「日本がわざわざ手放す訳ないですよ。有効活用もろくに出来ない癖に。」
「飼い殺しするつもりか。」
「ええ、その上、悪い知らせです。英国政府は先日公式に、英国艦娘の受け入れを拒否しましたよ。」
「なんで、英国政府が英国の艦娘を受け入れんのじゃあっ!?」
「彼女たち自身からすると英国も含めた世界のために戦ったという認識、英国の方からすると彼女たちはあくまでも日本のために戦ったという認識です。彼女たちは英国の国籍を所持していませんし、一応話の筋は通っています。あちらの陛下の承認も得られたとかで、永久追放扱いだそうです。酷い話ですよ、まったく。植民地の地元民扱いさ

れなかっただけマシ、との見解もありますが。」
「あんの二枚舌外交、三枚舌外交の国めっ！　おちょくりょんか！」
「あの国の伝統芸ですからね。ドイツもフランスもイタリアもソヴィエトもメリケンも、口裏を合わせたかのようにみな等しく同じ態度です。どうやら、我々の遥か頭上で皆さん握手されているようです。艦娘を受け入れようとする国外の国家は、現在一国も存在しません。」
「意味がわからん！　国民は？　あっちの国民は？」
「なにも知らされていないようですね。ただ、政府が受け入れない以上は逆らえないでしょう。」
「阿呆じゃ！　みんな阿呆じゃ！　世界の平和のために尽くした艦娘たちをなんじゃ思うとるんじゃ！　おかしいんか!?」
「先輩。」
「なんじゃ！」
「熊や虎を飼おうと思われます？」
「慕ってくれるならええと思う。」
「ああ、先輩はそっちの人ですか。」
「なんじゃ、そっちの人いうんは。」

「僕はどんなに慕ってくれようとも、熊や虎を飼おうとは思いません。」
「それと艦娘となんの関係がある？」
「僕たち提督からすると、艦娘たちと交流を持つことは熊や虎と仲よくなることに近いんです。」
「おめえのう、ふざけんなっ！　こちらのきれいなお二人さんが泣きそうな顔をしとろうがっ！」
「外見は、きれいですよ。確かに。」
「もうええっ！　どこの誰も引き取らんのなら、ワシが引き取る！　護国の英雄の皆さんをみすみす死地に送るなぞ、ワシには出来ん！　こげに可愛い娘さんたちを！　人でなしどもめっ！」
「後悔されますよ、きっと。」
「きっと幸せになっちゃる！」
「出来ますか？」
「出来るわい！」
「先輩、女心がわからないでしょう？」
「抜かせ！　ワシみてえな童貞にも出来ることはあるけえのう！　全員引き取る！」
「助かりますよ、先輩。まあ、精々死なない程度に頑張ってください。」

「おう、ワシらの生きざま見せちゃる！」
「三〇〇名ほどいますから大変ですね。」
「……は？」
「艦娘ですが、海外艦含めて一個中隊に支援小隊数個をくっつけたくらいの人員がいます。」
「そ、そげにおるんか？」
「今から引き取りを撤回されても、なんら恥にはなりませんよ。どうされます？」
「男に二言は無い！　女の子たちを路頭に迷わすなど、日本男児の恥！　艦娘たちは全員ワシが引き取る！」
「『侠』の考えですね。ご立派です。」
「皮肉か？」
「いいえ、僕にしては珍しく褒めているんですよ。昔、三国時代に徐元直という人がいました。直言（じきげん）をはばからず、他人のために泣くような人物だったとか。情にあつく義理深く、諸葛亮を劉玄徳に紹介したという大きな功績を残した人です。彼なくして、三国志は成立しなかったでしょうね。『侠』を体現する人物の一人として、僕は彼を尊敬しています。」
「ワシはそこまで偉い人じゃねえわ。」

「僕が高く評価しているんです。そこは誇ってください。出来る限りの便宜を図りましょう。」
「素直過ぎて、なんだかこわいのう。」
「『蟷螂の斧』に感服したんですよ。」
「ホンマかの？」
「ええ、勿論。」
「ところで、お前はどうなるんじゃ？」
「僕？　ええ、運よく生き残れた僕も直に無職です。他の提督たちも全員クビです。軍事裁判で死刑になった人もいますね。まあ、再就職は少々手こずるかも知れませんが仕方ないでしょう。」
「ほうかな。」
「そうそう、艦娘たちへ些少ではありますが、退職金が渡されますよ。軍票ではなく、日本円で支払います。残念なことですが、国のために奉仕したからといって、それが必ずしも報われるとは限りません。古代ローマでも、名将ハンニバルを破った大スキピオが国からどんな目に遭わされました？　まさに『狡兎死して走狗煮らる』ですよ。劉邦の部下であろうと、用済みになったら容赦なく処分。いえ、有能だから殺されるのは当然と考えるのでしょう。反乱でもされたら、鎮圧が大変ですから。古今東西、功臣を殺っ

ていることは皆同じです。殺り方は異なっていますけど。歴史からなんにも学べませんでした、僕たちは。先輩が、彼女たちを導いてください。これが、僕からのお願いです。」

芋煮会をしたいと言ったら、中庭を使ってくださいと言われた。

東北の風習じゃったかな？

大鍋を使って、芋をどんどん煮てゆく。

ワシみたいなおっさんの元に行くと聞いて怒る子喚く子泣く子もおったが、大淀さんや間宮さんや吹雪ちゃんが粘り強く説得してくれたのと芋煮が意外と好評で、ほんの少しは安心感を持たれたようじゃ。

こんなにええ娘さんたちを、どねえするつもりだったんなら！

その夜。

客室をあてがわれたワシは、思いもよらん話になったと日中起きた数々の事態を室内で反芻する。

ワシが甥っ子と住んどる笠岡諸島の六門島には、昔村上水軍だか海賊だかがおった砦の趾がある。

あっこを改修したら、なんとか住めるじゃろうな。

井戸もあるし、五〇〇の軍勢が立て籠れるらしい。
山羊の乳も鶏も足らんが、その辺は仕方ないのう。
寝るところや風呂も、早急に作らんとおえんのう。
物入りだらけじゃ。
美濃柱さんや藻国らにいろいろ持ってきてもらわにゃおえんのう。
しかし、なんでワシを提督呼びしたり司令官呼びしたりする艦娘たちがあげえにおったんじゃ？
ワシ、軍人さんじゃありゃせんのに。
コンコンと部屋の扉を叩く音がした。こんな夜更けに一体誰じゃ？
「どうぞ。」
入ってきたのは大淀さんと間宮さん。
二人とも寝間着姿じゃ。
思わずドキドキするが。
なんか、用なんかのう？
「どげんしたんじゃ？」
声をかける。
「あっ、あの、提督。そ、そのですね。」

「よ、夜伽に伺わせていただきました。」
「はあ？」
「我々二名はどうなってもいいんです。」
「ですから、他の子たちには無体なことをしないで欲しいんです。」
「きれいな娘さん、って言われて私たちは大変嬉しかったんです。」
「今まで、他の提督を含む軍の方々からは一度もそんなことを言われませんでしたから。」
「提督。貴方のためなら、我々二名はなんでもします。やり方が全然わかりませんけれども、一生懸命ご奉仕します。」
「私からもお願いします、提督。貴方の望まれるままに致しますから、どうかどうか他の子たちへの手出しは無しにしてください。どうすればいいかわかりませんが、提督のために頑張ってご奉仕します。」
「あんな。」
「「はい。」」
「あんたらはワシのことを勘違いしとる。」
「「そ、そんな……。」」
「ああ、そっちじゃねえんじゃ。あんたらの体が、ワシの目的ではないということを言

いたかったんじゃ。」
「「えっ？」」
「ワシはな、こげに不細工なご面相じゃが、女の人に酷いことをしたことなぞ、一度もありゃせん。そもそも、ワシは童貞じゃからな、あんたらみたいな素晴らしい別嬪さんたちと仲よくなれたら、それはもう嬉しゅうて嬉しゅうてたまらんじゃろう。だが、こんな形で要求するなんぞ、下の下じゃけえ。あんたらが無理することはねえんじゃ。素敵な男が現れた時に、そういうことをすればええんじゃ。」
「「提督……。」」
「さあ、はようお帰り。明日から忙しくなるんじゃけえ。きれいなあんたらのやさしい気持ちだけ受け取っとくわ。」
「「決めました、提督。」」
「ん？　なにをじゃ？　おうふっ、二人ともなにを……おえん、おえん、全部脱いで布団に入ってきたらおえ……。」

流転

岡山県笠岡市六門島（ろくもんとう）。
笠岡諸島の真鍋島（まなべしま）と六島（むしま）の間にある小さな島で、現在の住民は二人。
中年の井東喜作と小学四年生の鬼頭新一。
彼らは山羊と鶏を飼い、葡萄や蜜柑や薩摩芋などを育て、葡萄酒『瀬戸の月夜』や芋焼酎『鬼頭嘉右衛門』や蜜柑の皮を使った混成酒の『エルキュール』を醸造蒸留しながら生活している。
穏やかな瀬戸内海の豊かな海の幸に恵まれた島。
そこへ、三〇〇名に満たない数の新しい住民が増える。
行き場を無くした艦娘だ。
戦争が終われば、不用品。
意思持つ兵器は不要故に。
国際的には、自主的に武装解除し退役したことになっている。

余生を送るために、小さな島でひっそり暮らすとされている。
汚れた人間たちは、喉元過ぎれば熱さ忘れる者が殆どだった。
英雄たちは政治的力を持つ前に、静かに処分されてしまった。
古今東西、人間の行うことは変わらない。
権力を持つ者たちの腸は腐りきっている。
人の姿をしたバケモノ、が権力者的見解。
艦娘たちは魔物に近い存在とされている。
愚かな、それはとても愚かな判断だった。

島へ向かう準備は着々と進んでいた。
孤島に住むおっさんが来てから翌日。
呉鎮守府は慌ただしい雰囲気だった。
希望と不安と猜疑心とが内心渦巻く艦娘たちの中で、きらきら光る娘が三名いる。
大淀、間宮、吹雪。
大淀と間宮は喜作の世話役として悲痛な決意の元に立候補し、その犠牲的精神には全員感服していた。
だが、蓋を開けてみるとなんだか様子が異なる。

両名とも、時折にへらと笑ってさえいた。
思い出し笑いだったが、皆知らなかった。
笑う、ということさえ稀だったからかも。
なにがそんなに楽しいのだろう？
何故か両名ともがに股であった。
皆に心配されたが、真っ赤になりつつ大丈夫ですと彼女たちは返事をした。
なにか昨夜にあったのだろうか？
なにかあの男にされたのかと問われると、両名は更に赤くなるのであった。
吹雪は喜作の気さくさを褒めている。
誉め過ぎだと思うくらい褒めている。
きらきら輝きながら彼を褒めている。
今までこんな事態は起こらなかった。
各艦種代表たちを含め、艦娘たちは困惑の空気に包まれている。
総旗艦の長門さえもあまりの変化に戸惑っていた。
一晩であんなに変化するものなのか？
一体、井東喜作とは何者なのだろう？
彼を提督司令官呼びする者さえいる。

総旗艦たる者としての責任感から、長門は大淀間宮に今夜から私が世話役を代わろうかと申し出た。
犠牲者は少ない方がいい。
なにをされようとも、この長門、すべて受け止めてみせようと不安を圧し殺しつつ。
途端、提督のお世話は私たちがずっとずっと対応しますので大丈夫ですと断られた。
長門の困惑は続く。

厨房。
おいしいものはみんなの燃料。
料理長の間宮が時々にへらと笑うので、手伝いの料理上手系艦娘たちは首をかしげていた。
鳳翔が問う。
「あの、間宮さん。ちょっと聞いてもいいですか？」
「えっ？　はっ？　私、なにかやっちゃいました？」
狼狽（うろた）えようがおかしい。
何故か、がに股だし。
「その、時折にへらと笑われていて、なにかとてもいいことがあったのだろうとは思うの

ですが、それは井東さんからなにか言われたりされたりした結果なのですか？」
途端、真っ赤に染まる間宮の顔。
そして、それは色っぽくなった。
思わず、どきりとする厨房の娘たち。
「あ、あの、提督……いえ、喜作さんはとてもいい方で、私たちが信頼して間違いない方だと思います。」

執務室。
艦娘たちが笠岡諸島の六門島へと正式に移転する手続きは、滞りなく終わった。
気合いに充ち満ちた大淀が、阿修羅の如き勢いで書類業務を終了させたからだ。
時々にへらと笑いながら万年筆を書面に走らせる大淀を見て、提督は首をかしげた。
いつもは能面みたいというか、仏頂面というか、鉄面皮というか。
きれいだが面白みの無い艦娘、というのが今までの大淀に対する提督の評価だった。
それが今は、表情豊かな美少女と化している。
まるで別人だ。
こちらまで吸い込まれそうだ、となり、首を振って提督は書類作業を再開する。
『艦娘に魅入られてはならない』が軍関係者の鉄則。

それで何人死んだことか。
彼は下半身の変化を生理現象だと考え、先輩は一体なにを彼女にしたのだと思った。

工作艦明石。
艦娘たちの医師的位置にいる存在だ。
今、彼女は助手の夕張や秋津洲と共に困惑している。
相談に訪れた吹雪の悩みを全然解決出来ないからだ。
下穿きが汚れた彼女はその原因がわからなかった故に、明石の元を訪れた。
オイル漏れではない、と判明する。
だが、その先皆目見当が付かない。
艦娘は排泄しない。
艦娘には生理が無い。
だからオリモノも無い。
無病息災が艦娘の本領。
その筈だった。
なんらかの液体が下穿きを湿らせたことは明白だったが、その液体がなんなのか明石にも夕張にもましてや秋津洲にもわからなかった。

戦闘妖精としての力が失われたための、なんらかの副作用或いは弊害かもしれない。
もし、これが全員に見られる症状で人間に知られたら即時に処分されるやも知れぬ。
危険性は現在見られない。
能力の低下も見られない。
明石も夕張も秋津洲も下穿きが汚れたことは、発汗以外に無かった。
この汚れは、汗とは明確に異なる。
吹雪の鼠径部とその周辺を検査するが、異常は特に見られない。
別段、破損した訳でもなさそうだ。
軽い発熱と気分の高揚が見られる。
脳神経が特にやられた訳でもなさそうではあるし、今のところは受け答えも尋常だ。
結果、経過を見ようとの結論に至った。
吹雪の事例を鑑（かんが）み、体調が不調な者やなにか体に違和感を感じる者はすぐ相談に来るようにと、青葉と衣笠を通じて全員に通達した。
難病疫病の類ではないわよね、と明石は内心おそれた。
流石に不安を打ち明けることはしない。
パニックは容易に伝播する性質を持つ。
こんな時にそんなことを仕出かす訳にはいかない。

もし暴動に発展したら、全員討伐対象になりことごとく轟沈するだろう。
最悪の事態を想定し、明石は身震いした。
長門にだけは報告する必要があるだろう。
どうぞどうぞなんでもありませんように。
彼女は神仏に祈った。
この世界に顕現した人ならぬ戦乙女は、静かに皆の平穏を願うのだった。

艦娘たちの六門島への移動には、軍用の輸送船を使うそうじゃ。
まったく、こげなきれいな娘さんたちに酷いことなぞしよって。
しかしまあ、俵をひょいひょい運ぶ姿はなんとも勇ましいのう。
新一も別嬪の女の子がいっぱい増えるけえ、でえれえ驚くじゃろうなあ。
誰か新一の嫁さんになってくれたらありがてえんじゃけど、そげえにうもうはいかんじゃろう。
しかし、なんじゃ。
艦娘は女学生みたいな恰好の子から踊り子のような姿の子まで、いろいろおるのう。
髪の毛もいろんな色がある。
ハイカラさんたちじゃのう。

ちいと破廉恥な気もするが、あれが正式な戦闘衣裳らしいからなんかようわからん。
よし、他のもんたちには『ハイカラさん』で押し通そう。
大正の頃には『モボ』とか『モガ』ゆう奴らがおったそうじゃけえ、適当にようたらわかりゃあせんて。
ワシはワシが出来る限りの善意をお嬢さんたちに行うまでじゃ。
それだけじゃ。
ええ天気になったのう。
吹雪ちゃんもずいぶん機嫌がいい。
大淀さんと間宮さんと昨晩あげなことをしてしもうた。
二人とも、大丈夫じゃろうか？
ついついやり過ぎてしもうた。
ワシも初めてじゃったからな。
次はもっとやさしくせんとな。
おお、二人が手を振りながら近づいてきょうる。
ほんま、別嬪さんたちじゃ。
ワシはまっこと果報者じゃのう。
流転する艦娘に幸あらんことを。

ワシは天の神様と仏様に祈った。

相撲

角力（すもう）
かつて
なにも身に付けぬまま
闘いあった
神への奉納神事
女相撲
平和な時代に
見世物とされた興業
女と男の夜戦は相撲
夜の格闘技
パンクラチオン
『相撲』
場外の駆け引きが

女たちを惑わせる

呉鎮守府地下闘技場。
別名、マッスル・インフェルノ。
そこで今、艦娘たちによる奇祭が開催されている。
或いは秘祭、とでも言えばいい存在なのだろうか？
近々『普通の女の子のようなモノ』にならざるを得ない、艦娘たちが祭る行い。
男子禁制の行事を、井東喜作は特別観戦していた。
一糸まとわぬ艦娘たちが、己の技術を駆使して真っ向からぶつかり合う。
大本営への予算の申請が認められなかった彼女たちは、ならばとばかりに裸体格闘技を実践することに決めた。
それは人智を超えた力の発露。
最軽量級の海防艦とて、鬼気迫る雰囲気で嬉々としつつの格闘戦の開始。
激しい闘気の応酬。
唸るは胸部の双丘。
跳ねるは女の鼓動。
膨らむ双方の覇気。

揺らめく影が蜃気楼を生み出し、幻影が女力士たちを惑わせる。
馴れ合いの八百長試合では、けして見ること能わぬ意地の激突。
権力闘争に明け暮れ、本質を見失い自浄作用さえ持たぬ人々では行えない死闘。
弱き者へ振るう暴力しか持たないモノどもが、けして辿り着けぬセカイの花戦。

大淀さんと間宮さんとが近づいてきた。
見慣れたとまではまだいかぬ肢体じゃ。
照明の中でその美しさをあますことなく、ワシの眼前で披露してくれとる。
堂々とされとると気後れするが。
せめて、マワシだけでもしてくれとったらえかったんじゃがのう。
魅力的過ぎて、目のやり場にぼっけえ困るがな。
「負けませんから。」
大淀さんがワシの目を見つめながら、決意表明した。
「私にも譲れないものがあります。」
間宮さんもワシを見つめながら言う。
奮闘の結果として大淀さんは軽巡洋艦部門優勝、間宮さんは特殊艦艇部門優勝となった。

吹雪ちゃんが近づいてきた。
なんかその、でーれーきらきらしとるみてえじゃ。
にこにこしつつ、ワシに無邪気に抱きついてくる。
吹雪ちゃん、そがあにされるとえっと困るんじゃ。
「みんな、やっつけちゃうんだからっ！」
そして、えろうキラキラした吹雪ちゃんは駆逐艦部門で優勝した。
各艦種部門優勝者が決定した後、総合優勝者を決めようという話になってしもうた。
即座に諾と応じ、気合いを魂の遊底に再装填する優勝者たち。
おとろしいのう。
やはり、根は軍人さんじゃが。
大淀さんと間宮さんの一戦は、気迫が満ち過ぎておっとろしい程じゃった。
紙一重の大外刈で敗れた間宮さんは、ワシの目の前で大開陳してしもうた。
その後猛獣同士の如き激突の末に吹雪ちゃんが大淀さんを破り、重巡洋艦部門優勝者の摩耶ちゃんさえも倒してしもうた。
まさに番狂わせじゃな。
みんな丸見えじゃがな。
ありがたいやら恥ずかしいやら。

決勝戦で戦艦部門優勝者の長門さんと激戦を繰り広げたが、吹雪ちゃんはものの見事に負けてしもうた。

敗者に声をかける勝者。

「見事だったぞ、吹雪。日頃の修練を存分に感じさせてもらった。よくぞ私相手にここまで粘ったな。」

「でも、私、負けました。」

「生きているじゃないか。」

「勝たなくてはいけなかったんです。」

「いいぞ、その心構え。それは、艦娘である我々に必要不可欠なものだ。艤装が無くなろうと、我々は戦士だ。たとえ素手でも敵をほふってみせようぞ。ふふふ……この風、この肌触り、この匂いこそ戦場よ。」

取組の最後は大和さんと武蔵さんじゃ。

特別枠じゃゆうて、誰とも戦っとらん。

この二名でなくてはおえんらしいのう。

吹雪ちゃんとかぶりつきで取組を見つめたんじゃが、思わず鼻血が出てしもうた。

艦娘たちが六門島へ移動する当日。
結局、厳重な報道管制のために記者は一人も現れなかった。
仮に現れたとしても、厳重な検閲の末に毒とも薬ともつかないような記事が新聞や雑誌の紙面を飾るだけだ。
もしくはラヂヲの電波に乗るばかり。
ならば、取材に来る意味が全然無い。
政府と軍部双方を敵に回して勝てる存在など、欧米勢くらいのものだ。
軍部は新造艦や外国艦で装備を固める方針らしく、当面は海賊や反政府組織や深海棲艦の残党を相手にするのが中心業務になるだろう。
戦後は世界の中心的存在になる筈が、外交での致命的失敗によって目論見は頓挫。
はっきり言って無能だが、政府は大本営発表を用いて事実を歪曲した。
歪んだ線路を汽車が走る。
いつ脱線してもおかしくない。
「総員、呉鎮守府に敬礼！」
長門の敬礼に合わせ、艦娘全員が整然と一糸乱れぬ敬礼をする。
長きお別れ。
ロング・グッドバイ。

陸軍輸送船の『虎王』が六門島（りくもんとう）の小さな港に着いた。
「はっやーい！」とか「いっちばーん！」とかの元気な声が聞こえ、解放感に満ちた声が島へ抜ける。
島の住民である鬼頭新一は、沢山のきれいな女の子たちが船からぞろぞろ降りてくる風景に驚愕した。
少年を見つけ、豊かな双丘を震わせた何名かが少年の元へ殺到してゆく。
それはまさに泰山鳴動。
山がいよいよ動き出す。
連峰。
艦娘山脈。
青い山脈。
万丈の山々が瞬く間に形成される。
函国関程の堅固な要塞が完成した。
ＥＦＧＨ包囲網とでも言うべきか。
なんだなんだ、とばかりに島暮らしの犬やら山羊やらがぞろぞろと艦娘たちの前に現れた。

戯れる艦娘もいる。
こわごわと、黒い靴下を履いたみたいな山羊に触れる艦娘総旗艦の戦艦長門。
途端、悪戯好きの雌から見事なうっちゃりを喰らわされる。
その姿にどっと笑う艦娘たち。
照れて頭をかく、最強の艦娘。

そして、彼女たちの島暮らしは始まった。

熱量

膨大な
あまりにも膨大な
鉄の塊が
海の底に沈んだ
敵味方関係なく
砲撃
雷撃
爆撃
降り注ぐ死の咆哮
あっけなく皆殺し
死は平等に訪れる
生き残れるは異能

ほんの僅かな幸運
一ミリに満たない
ほんの僅かなズレ
身を守る筈の
鉄の装甲をも
溶かさんとした熱量
破壊のためなる熱量
影すら残さない熱量
幾多の命をも奪った
感情持たぬ死の熱量
その余熱は
戦後の艦娘をも蝕み
幾夜も眠れぬ夜を
過ごさせる
生き残ったことが
必ずしも幸運とは
言えない

散らなかったことが
幸せの道に続くとは
限らない
それは
次の地獄へと繋がる
いざないでも
あるのだから
ここは
戦後ののんびりした
瀬戸の島
海幸彦が
よく来たなと囁く島
囁きは風を呼び
血の繋がりを求める
助け合い
譲り合い
互いの熱量で

生きる糧をあがなえと
死兆星の輝きが囁く
山幸彦はただ微笑むだけ
やさしく悲しく囁くだけ
風に紛れる言葉呟くだけ

『熱量』
ちっちゃな妖精たちが
情熱を促す

今日は、たくさんたくさんのおねえちゃんたちが島に来ました。
きさくおじさんが、お国のえいゆうであるかんむすさんたちをつれてきたからです。
あらかじめでんぽうをくろいせびろのもこくさんからもらっていたので知ってはいたけれど、あらためてたくさんたくさんのおねえちゃんにびっくりしました。
かんむすさんたちは、このろくもんとうできさくおじさんやぼくたちといっしょにくらすのだそうです。
たくさんたくさんかんむすさんたちはたたかってきたから、このしまでゆっくりくらしたいそうです。

みんなみんなきれいなおねえちゃんばっかりなので、ぼくはびっくりしました。
ほえー、とながめていたらなんにんものおねえちゃんにぼくはかこまれました。
そして、おねえちゃんたちはぼくのせわがしたいときさくおじさんに言います。
おじさんはおねえちゃんたちにぜひともおねがいしますと言いました。
たくさんたくさんのおねえちゃんが、いっぺんに出来ました。
やまとさん、むつさん、ふそうさん、かがさん、そうりゅうさん、うんりゅうさん、ちとせさん、たかおさん、あたごさん、まやさん、ちょうかいさん、たつたさん、あがのさん、うしおさん、しらつゆさん、はまかぜさん、ながなみさんがあたらしいぼくのおねえちゃんです。
とてもうれしいです。
おぼうさんみたいなすがたのようせいさんがつえをじめんにつきたてると、おんせんがふきだしてきました。
「みんなで一緒に入りましょうね。」
やさしいこえで、やまとさんが言いました。

新一が早速艦娘たちとなかようなって、安心した。
よう出来た子なんじゃが、ちょっと気の弱いところがあるけえな……なんかおっぱい

の大きな子ばかりじゃな。
「これは興味深いですね。」
　ワシの隣にいる大淀さんが、手帖に鉛筆でなにやら書き込んどる。
「喜作さんは私たちの他に、どんな子から世話をされるのがいいですか？」
　不意に聞かれたんじゃが、びっくりした。
「は？」
「相撲の時によく見ていた子たちがいいですか？」
「そ、その、大淀さん、なにようん？」
「私たち二名では、とても提督の熱量を御しきれないと思うんですよ。」
「いや、その、ワシ、女の子と付きおうたことは無いけえ、ようわからんのですわ。あ、ワシ、大奥みてえなのがええとは思っとりゃせんけえのう。大淀さんと間宮さんを大切にしたいと思っとんじゃ。」
「私たちは毎日突き合っているじゃないですか。毎日失神するのは、あまり好ましく思えません。」
「その、無理をさせとったら誠にすまんことで……。」
「いいえ、提督を責めている訳では……責められているのは私たちの方ですね。毎回攻め落とされていますし。」

「そげえに大変ですか？」
「あと数名いた方が、心身的に安全ではありますね。」
「ワシ、そねえに絶倫じゃったかのう？」
「ええ、私たちの腰が抜けそうなくらいに。」
　そこへ透け透けの吹雪ちゃんが現れた。
「あっ、司令官！　温泉ですよ、温泉！　温泉が噴き出てきました！」
「吹雪ちゃん？　あんた、びしゃこじゃが。大淀さん、タオルか手拭いか、なんかの用意を！　温泉!?　こねえな島に？」
「はい、早速準備します。」
「さあっ、行きましょう！」
　確かに、温泉が湧き出とった。
　あったかい飛沫（しぶき）が飛んできとるが。
　こげなん聞いたことがねえで。
　きゃーきゃー言いながら濡れとる女の子たち。
　まあ、この辺は田畑もねえし、丁度ええかな。
　温泉は湯量も熱量も充分なようじゃ。
　艦娘たちの体の線がくっきり出ておって、ドギマギするのう。

吹雪ちゃんに引っ張られたワシもびしゃこになってしもうた。
「妖精さんたちは、帝政ローマ式のテルマエ・ロマエを建築するそうですよ。」
トンテンカントンテンカンと、なにかを作る音がしとる。
「お風呂ですよ、お風呂！」
興奮した吹雪ちゃんが服を脱ぎ出す。
既に服を脱いだ艦娘たちが何名もおって、急ぎ掘ったらしい即席の温泉に浸かっとった。
新一も沢山の艦娘に包まれて入浴しとる。
吹雪ちゃんに脱がされてしもうたが、ワシの主砲は臨戦態勢じゃった。
恥ずかしいのう。
変に隠すのもどうかと思うたが、艦娘たちがびっくりしてじいっと見つめるけえ取り敢えず手拭いを腰に巻いといた。
「あの、司令官、今の単装砲はなんですか？」
「う、あれはのう、ナリナリテナリアマレルモノじゃ。」
「ナリナリテナリアマレルモノ？」
「う、うむ。男にしか付いとらんもんじゃ。」
「あの、じゃあ、新一君にも今のような単装砲が装備されているんですか？」

「ま、まあ、そうなるのう。」
「で、そのナリナリテナリアマレルモノはなにに使うんですか?」
「主に排水用じゃな。」
「排水?」
「水分を喉からとる。その後余分なもんが体から出て行く。汗もそうじゃ。主なもんはこのナリナリテナリアマレルモノからしゃあしゃあと出て、無事体外に排水するという寸法じゃ。」
「見てみたいです。」
「は?」
「ナリナリテナリアマレルモノからどんな風に排水しているのか、私、見てみたいです!」
「そ、その、見る程のことでもねえで。」
「私、喜作さんのことをいっぱい知りたいんです!」

おねえちゃんたちとおんせんにはいりました。
おねえちゃんたちのおっぱいはとってもおおきかったです。
じっと見ていたら、まやおねえちゃんが言いました。

「おう、新一。おっぱい吸ってみるか？」
「えっ？」
　ほかのおねえちゃんたちもびっくりしています。
「人間を含む動物の赤ちゃんは、母親の乳を吸うんだってよ。新一くらいのちっちゃいガキもおっぱいをたまに吸うって、前に兵隊から聞いたことがあってよ。ほれ、ほれ。」
　にこにこしたまやおねえちゃんがぼくにみっちゃくして、おっぱいをちかづけてきます。
　もう四年生だけど、ぼくはおねえちゃんのおっぱいをちゅーちゅーしてみました。
　なんだかなつかしくて、はやくになくなったお母さんのことをおもいだしました。
「ははは、赤ちゃんみてえだな、新一。」
　まやおねえちゃんが、どんどんきらきらしてきました。
「とっても嬉しそうね、摩耶。」
「おう、なんだか気持ちいい。」
　あたごおねえちゃんとたかおおねえちゃんが、ぼくにちかづいてきました。
　二人のおっぱいもちゅーちゅーしました。
　みんなのおっぱいをちゅーちゅーします。
　さいごに、うしおおねえちゃんのおっぱいをちゅーちゅーしました。

やまとおねえちゃんが、ぎゅっとぼくをだきしめます。
「ずっとずっと傍にいますからね、提督。」
ていとく、ってかいぐんのえらい人のことですよね。
どうして、おねえちゃんはぼくのことをていとくとよぶのでしょうか？
どったんばったんおおさわぎし、おにぎりをたべておみそしるをのみました。
まみやさんたちはとってもりょうりがじょうずです。
よるねむるとき、おねえちゃんたちはじゃんけんをしてだれがぼくをだっこしてねるかきめました。
おねえちゃんたちは、とってもさみしがりやさんみたいです。
やまとおねえちゃんとむつおねえちゃんにだきしめられながらおやすみしました。
やまとおねえちゃんがおっぱいをちゅーちゅーしてほしいと言ったので、ちゅーちゅーしてあげました。
むつおねえちゃんもちゅーちゅーしてほしいと言ったので、してあげました。
あしたからはいっぱいいっぱいさかなをつったりおうちをたてたりやさいをつくったりおさけをつくったりとたいへんです。
あしたもはれるといいな。

魔法

無粋な煉瓦の壁
無骨な鋼鉄の檻
ただ帰れる場所が
欲しかった
ただ戻れる場所が
欲しかった
決めた
あなたを私たちの
提督にする
あの人のこと
知らないことばかりだ
妖精

それは魔法使いのみが
契約し能（あた）う存在
魔の者
人の手にはあまる存在
彼らの甘言に
耳を傾けてはならない
彼らの提案を
安易に受けてはならない
大きすぎる代償を
払う破目に陥るのだから
やさしい顔をして
残酷な契約を迫る
きれいな妖精の言葉に
耳を傾けてはならない
ハニームーンの
準備をしよう
中年男と共に

瀬戸の孤島へ
向かった艦娘たち
見知らぬ土地
見知らぬ人
孤独だった彼女たちに
セカイはやさしく
手を差し伸べる
『魔法』
艦娘たちの中で
止まっていた
時計の針が
動き始める

洋風要塞都市にするか。
和風要塞都市にするか。
妖精たちは賑々しく議論しながら、六門島（ろくもんとう）の改造計画に着手している。

かのドイチェラントの、頑健なるブンカーをも凌ぐ防御力が求められた。
地下街の建設にも着手する。
妖精たちが妖精郷から自由に往還出来るようにと。
そのセカイは、ヒトのセカイのすぐそばにある別世界になりつつあった。
穏やかな瀬戸の孤島はゆるやかに、しかし大胆な改革を迎えつつあった。

ちょこまかと妖精たちが島のあちこちで走っとる。
欧州風の風呂がいつの間にか出来とって、あん時はでえれえ驚いたがな。
冬休みを終えて真鍋島の小學校へ向かう新一の送り迎えは、大和さんたちが引き受けることになった。
ありがてえのう。
新一が母親や姉を欲しがっとったのは以前から知っとったから、丁度えかった。
お風呂も寝るのも一緒じゃけえ、うんと甘えたらええ。
随分沢山おるようじゃが、ま、かまやあせんじゃろう。
田畑でも妖精たちが艦娘たちと一緒に手伝ってくれるけえ、大いに助かっとる。
妖精なぞ、おとぎ話の世界の話とばあ思っとったが現実は受け入れんとおえん。
燕尾服姿で骨頭の妖精があちこちに指図して、てきぱきと妖精たちが動いとる。

なんともはあ、見事なもんじゃ。
洋風の城と和風の城とどちらが好みかと聞かれたので和風じゃと答えたら、大喜びする妖精と落胆する妖精とがおった。
ええと、ワシの見間違えでなかったら、あれは天守閣じゃなかろうか？
翌朝には建築が既に始まっとって、どんどん二の丸三の丸と作っとる。
いったい、なにと戦うつもりじゃ？
住居問題は妖精たちに任せるとして、食料問題を解決せにゃおえん。
うちに出入りしとる行商人の美濃柱さんと喪黒（もこく）さんとの双方に話を振る。
食いもんの恨みはきょうてえけえのう。

その距離を狭めたい艦娘
距離感のわからない艦娘
愛さえ知らぬ戦乙女たち
恋さえ知らぬ戦乙女たち
鈍感な提督たち
やさしき男たち
おっさんと少年

素朴な人間たち
恋愛を知らない提督と艦娘
ヒトとツクリモノの家族ごっこ
性的に幼い者たち
無知なる者が殆どのセカイ
変革期など訪れそうにない
もしも切っ掛けがあったならば
なにかしら変わるかもしれない

妖精たちから酒が欲しいと言われたんで、島で醸した芋焼酎と葡萄酒と蜜柑の混成酒と檸檬の混成酒を進呈しといた。
輪になって陽気に踊る妖精たち。
酔ってふわふわ浮かぶ妖精たち。
いつの間にやら艦娘で酒好きなもんたちも寄ってきとったけえ、その子たちにも酒を振る舞った。
間宮さんたちが酒の肴を持ってきて、段々宴会になってきょうるが。
大淀さんがワシの隣で、酒とか羊羹やらの事業展開計画を説明する。

吹雪ちゃんがやって来て、酒を呑んでみたいと言った。
女学生に見えるんじゃけど、ええんじゃろうか？
大淀さんに確認したら、実質年齢は成年を過ぎているので構わないでしょうとのことじゃった。
蜜柑の果汁水で割った檸檬の混成酒を出してみる。
おいしいおいしいとくいくい呑むので慌てて止めさせたんじゃが、暑い暑いと彼女は服を脱ぎ出した。
周りの艦娘たちも暑い暑いと脱ぎ出す。
負けてはいられませんと、大淀さんまで脱ぎ出した。
おえんがな。
結局、ワシの周りで裸ん坊の艦娘たちと妖精たちがぐるぐる踊ったのじゃった。

どんなものが
どんなことに
影響するのか
なにを助けて
なにを追い出すか

奇妙な慣（なら）わし
けったいな風習
来訪神
カムイ
旧くから
伝わること
破っては
ならないこと
守らなくては
いけないこと
薬にもなり
毒にもなるもの
いつの間にやら
ヒトの隣にいる
モノたちのこと
ヒトは
ヒトならぬモノたちと

隣り合わせに
生きている
そのことを
よく知らないままに

羅馬

平和が訪れた
爆発的野心を抱いて
映画関係者たちが
新たなセカイを模索する
そうだ
羅馬（ローマ）を舞台にした
映画を作ろう
かつて偉大な文化を築いた地で
新たなキネマを作ろう
そして
新人女優と名優が
撮影に臨んだ
三ヵ月の時間をかけて

丹念に撮影された
やがて
屈指の作品が完成した
平和を象徴する作品が
生み出された
『羅馬』
それは
人々の夢が詰まった
果てなきセカイに繋がる場所

私の名前はローマ。
誇り高きイタリア艦娘。
日本生まれの日本育ち。
ご飯と味噌汁と漬け物を食べるのが当たり前な、なんちゃってイタリア娘。
世界のために戦い、イタリアへ帰る日を夢見た。
かすかな記憶の中に眠るイタリア。
美しきイタリア。

だけど。
戦争が終わっても、私は、いえ、私たちイタリア艦娘は祖国と信じる国へ戻ることを許されなかった。
それはメリケン艦娘もブリテン艦娘もフランス艦娘もソヴィエト艦娘も同様だった。
嘆き悲しむのは、日本艦娘も同じだった。
彼女たちも祖国には受け入れられなかったのだ。
世界の平和に貢献した筈の私たちは、世界各国の政府にとって厄介な存在に過ぎなかったらしい。
私たちは地中海に似た気候のクレの基地に集められ、煉瓦と鋼鉄の監獄で過ごすことが決定されようとしていた。
そこへ中年の日本人男性が現れ、私たちを引き取ることに決まった。

ロクモントウの生活は悪くない。
イタリアを想うと悲しくもなるけど、海外艦娘たちのまとめ役として気丈に振る舞わなくてはならない。
オオイがかなり気にかけてくれ、会話している内に私たちはいつの間にか親友になっていた。

彼女はどうやら、ロマンティストのように見える。
オオイはキタカミの話や姉妹たちの話をよくする。
私もリットリオやポーラなどの話をする。
彼女はやさしく気遣いのよく出来る娘だ。
きっといい嫁になれるだろう。
相手がいればの話だけれども。

ローマで三ヵ月撮影されたという、『ローマの休日』が日本でも上映されると聞いて私たちはキサクになんとしても観たいと迫った。
この好機を逃してなるものか、と。
キサクは艦娘全員が映画を観ることが出来るようにと、随分駆け回ってくれたようだ。
オカヤマのとある映画館館主が意気に感じてくれたらしく、くだんの映画の上映期間終了後にロクモントウで特別上映会を開いてくれることになった。
政府もダイホンエイも特に横槍を入れるつもりは無いようだ。
他に、検閲を受けた日本の映画二作も上映してくれるという。
オノミチからトーキョーの子供たちに会いに行く老夫婦の話とサムライたちが村を

守る話で、どちらも人気のある映画だとか。
人間の好意に感謝しよう。
ただ。
キサクが謎の言葉を呟いていたのが気になる。
「なんで接吻したらおえんのなら?」
セップンとはなんだろう?
後でオオイに尋ねてみるとしよう。

ローマ。
私が冠する名前の元になった、麗しの都の名前。
その都を舞台にした映画。
これが興奮せずにいられようか?
『キネマ詳報』の『ローマの休日』特集号を、擦りきれそうなくらいに読み込む。
ヒロシマでもフクヤマでもカサオカでもオカヤマでも売り切れだったそうで、皆がっかりしていたところ、行商人のモコクがふらりと持ってきたのだった。
彼はこの映画を観たそうで、皆の前で矢継ぎ早の質問を受けていた。
まるで大規模作戦に臨むような表情の艦娘たちに、普段無表情のモコクが青白くさえ

見えた。
真実の口。
スペイン広場で食べるジェラート。
スクーターのヴェスパ。
夢が止めどなく広がる。
ローマ。
私のローマ。
いつかきっと訪れてみせる。
密かに誓い、私は近い内に訪れるだろう上映会へと思いを馳せるのだった。

御宝

潜水艦。
艦娘の中では最も運用が難しいと言われる艦種。
長門と大淀によって秘密裡に輸送艦内会議室へと呼ばれた彼女たちは、とある秘密任務を授かった。
作戦名は『海底二万哩（マイル）』。
「お前たちに特殊任務を与える。」
「世界の海に沈んでいる財宝を入手してください。」
頷く潜水艦たちに肌のとても白い娘たち。
豪華なお宝を積んだまま沈んだ船は多い。
それらの財貨を入手出来れば、彼女たちの経済力が飛躍的に高まる。
この島が独立勢力として生き延びるためにも、大金の入手は必須項目であった。
肥沃な島は今年も豊作だろうし、海産物も豊漁になるであろう。

だが、それでは足りない。
圧倒的にすべて足りない。
マルタやサンマリノやリヒテンシュタイン辺りの独立性を保つのが、今のところの目標だ。
海の妖精たちと仲魔になった者たちの協力があれば、ここに楽園を構築することも可能だと思われる。
財界政界のお偉方は間宮羊羹で買収だ。
稀少且つ高級な甘味の誘惑は強力無比。
一度でも食べたら、忘れられない旨さ。
豊かな慈味に深い余韻は正に一騎当千。
それと、酒は更なる高品質化を目指す。
庶民的普及酒と高級酒を並行して醸す。
既に複数の引き合いが来はじめていた。
稀少性と高評価。これが肝心要なのだ。
この戦後の混乱期を活用せぬ手は無い。

「『海底二万哩』作戦担当艦隊の、『深海御宝探検隊』抜錨なのね！」

「邪魔する奴らは、ぜーんぶお利口魚雷の餌食でち！」
「これ、『侵食魚雷』って書いてあるけど使えるのかな？」
「お酒がたんまりあると嬉しいな。」
「呑みすぎは駄目よ。帰投するまでは我慢しなさい。」
「オタカラ、タンマリ、ウレシイ。」

深海を得意とする者たちによって、稀少な財宝が次々に獲得される。
艦娘を受け入れなかった世界各国の政界要人や経済界のお偉方や大金持ちだが、海から引き上げられたお宝に対しては目の色を変えて自らの邸宅に受け入れようとした。
人の欲に果ては無い。

リヒテンシュタインに住むメルカッツ伯爵を通じ、ササンのオークションに貴重な品々が続々出品される。
中世頃と思われる磁器や漆器や陶器など。
刀剣類や宝飾類や衣類なども出品された。
いずれも初出品の珍しき品々。
考古学的にも価値の高い品々。
美術館や博物館も鵜の目鷹の目で注目中。

出品者は匿名の日本人という。
スイスのベルンに本拠を置く個人向け資産運用金融機関のミュラー伯爵が出品者の保証人ということもあり、大量に放出された旧き名品群は好事家たちの耳目を惹いて白熱した接戦が連日連夜繰り広げられた。
フィレンツェはメリチ家の『イル・マニフィコ』(偉大なる男の意、尊称)やウッツァーノ家、ミラノ公スフォルツァ、アメリカのコルト家やスミス家やウィンチェスター家、東方帝政ロシアのロマノフ家も積極的に参入したため、戦後初のロンドンでの大規模オークション会場は世界各地の大金持ちが集う一大決戦地と化した。
ソヴィエト連邦や大陸の高官たちも、代理人を通じて本人たち的に言うとこっそり入札していた。
したたかな欧州の魑魅魍魎世界に棲息する人々からはバレバレだったが。
中東の強国たるアスラン王国からは、やさしく気高く優雅で麗しい少年王の『獅子王』アルスラーン様がお付きの武官文官たちと共にオークション会場に現れ、大きな話題になった。
晴れ渡った夜空のように深い色の瞳に、市井の人々を尊重する気遣いに満ちた高貴なる性質。
極めて温厚篤実にして繊細、相手の気持ちを汲む能力に非常にすぐれるお方。

彼に魅了されない人がいるだろうか？

いや、いない。

その筈である。

まさに姫殿下の面目躍如だ。

周囲の人々を癒しの波動で悩殺しながら素晴らしき少年王は東洋の珍しき物品にきらきらと目を輝かせたもうて、縦横無尽に知略を駆使することで有名な王佐の軍師は身命を賭して数多落札せんと大発奮し意気込むのだった。

質素堅実な服装を好まれる殿下はその後部下の暴走をたしなめ、私は見るだけで満足なのだとのたまわれたのであった。

結果、姫殿下と同行されていた美しき母親のタハミーネ皇太后向けと思われる、小さな磁器を一点落札されただけという。

冷ややかにも見えるご母堂の対応にも無垢なるやさしさで微笑む少年王の度量の広さは多くの人々に感銘を与えたもうて、『かの国の強さは王の強さなり』と感服せしめたもうたのだった。

会期中、アスラン王国隣国のルシタニア王国国王インノケンティウス三世が姫殿下の母君にはぁはぁと興奮しながらちょっかいを出し、重鎮のモンフェラート上級大将に淡々とたしなめられていた。

それは醜聞を大層好む野卑下品下衆な覗き見大好き系バルバロイ的恥知らずな蛮族記者たちの恰好の餌食となり、電話回線電報伝書鳩などを通じてロンドンから世界各国に即座に発信される。

高尚な人ばかりが、この世に生きているのではない。

マスメディアの発言を鵜呑みにする人は意外に多い。

斯くて、大本営発表は別の形で今も生き続けている。

自分自身の頭で考えることを拒否するのは楽だから。

兎に角頷けば、世論に合致しているかに見えるから。

考えることは意外と莫大なエネルギーを要するから。

これを聞いたルシタニア王国国王王弟兼宰相の中年独身男性苦労系は、「あのアホタレがっ！　またもや、世界中に恥をさらしおって！」と激怒したという。

彼の苦労はこれからも続く。

このオークション会場での最大の話題となった言葉は、「艦娘に一度会ってみたいものだ。」という素晴らしきアルスラーン様のものだった。

姉が最近ふわふわになってきている。

呉にいた頃は、しょっちゅう険しい顔をしていたものだが。

落差がかなりでかいな。
変われば変わるものだ。
「それでですね、提……新一君と一緒にいるとふわーって気持ちになってくるんですよ。ふわーって。わかります？」
「さあな、わからん。」
「ふふ、武蔵にもわからないことがあるんですね。新一君の周りにいる子たちと、今度『鬼頭艦隊』を結成するんですよ。貴女も参加しませんか？」
「私は私で判断する。……大和、お前は今幸せか？」
「はい！　勿論です！　提督は私の御宝ですから！」

北欧にサーブゆう航空機の会社があるそうじゃ。
そこの車がこの六門島（ろくもんとう）へやって来た。
なんと、ワシへの贈り物らしい。
……えらく高そうな舶来品じゃが。
ワシの隣では明石さんが大興奮して抱きついてきょうるし、夕張ちゃんや秋津洲ちゃんも興奮しとるように見える。
北上ちゃんも、「北欧って侘び寂びだよねえ。」などと言っとる。

目をキラキラさせた明石さんが、ぴょんぴょん跳ねながら言った。
「これは一九四七年式のサーブ９２ですね！　少々旧い車ですが、状態はとてもいいですよ。この濃緑色は生産国のスウェーデンの森の色を表しているのだと思います。航空機製造会社のサーブが、初めて販売した自動車だそうですよ。スウェーデン人技術者のグンナー・ユングストロームが設計を手掛け、車体はモノコック構造を採用。小型軽量を旨とする、二五馬力二気筒式内燃機関を搭載。重心高を下げて操縦性を上げるところがにくいですね。空想科学小説の挿し絵を描いていたこともある工業意匠家のシクステン・サッソンが巧みに構成した外観は、『素晴らしき未来』を形にしたモノだと考えます。」
「お、おう。そねえにええ車なんか。」
「ええ、それはもう。喜作さん、この車を分解整備していいですか？　いいですか？　いいですよね？」
「あ、明石さんたちがちゃんとやってくれるんじゃったら、かまわんわ。」
「よーし、みんな！　気合いを入れてばらすわよっ！」
おーっ！　という声が足元からも聞こえる。
妖精たちも気合い充分のようじゃ。
ドイツのゾーリンゲンゆうとこの包丁や鋏もいただいたし、ステッドラーゆう会社の

青い洒落た鉛筆も消しゴムももろうた。

フィンランドに住む童話作家のヤンソンゆう人が書いた『小さなトロールと大きな洪水』の英訳版を、今、ウォースパイトさんがせっせと日本語に翻訳しとる。

秋雲ちゃんが原作の挿し絵を模写して、一生懸命紙芝居風に描いとる。

訳した部分を毎日駆逐艦たちに、実に丁寧に読み聞かせとるのは流石陛下じゃ。

秋雲ちゃんの紙芝居が効果を出しとる。これぞ二人三脚の日英同盟じゃ。

外国作品を日本語版に翻訳してゆく仕事ゆうのも、ええかもしれんなあ。

他にもいろんなもんが来とる。

リンツゆうスイスのチョコレートが向こうの伯爵さんからぎょうさん送られてきて、みんなも興奮しとった。

あれは旨かったのう。

しかし、なんでこげえに沢山の舶来品がこねえに辺鄙（へんぴ）な島に届けられるんじゃろうか？

神戸や横濱や東京ならまだわかるんじゃがのう。

このレルヒェゆう雲雀（ひばり）の姿が彫られた鋏はすっとした形で、よう切れる。

流石はドイツ製品じゃのう。

みんなが喜んどる姿は、ワシにとって御宝じゃ。

この笑顔を守らにゃおえん。

大淀さんがとことこと近づいてきて、ワシの耳元で色っぽく囁いた。

「イタリア製の下着が手に入ったんです。今晩、お見せしますね。」

猛禽

可愛らしい声
やさしい声
愛らしい声
ゆるやかに
声をかけて
微笑み向ける娘たち
かつて血にまみれた手で
少年の頬をそっとなぜる
無垢な男の子は
なにも知らない
肉食系の
鋭い爪を持った娘たちが

覚醒しつつあることを
姉のように慕う娘たちの
本来の戦いの有り様を
『猛禽』
すっと細められた瞳は
捕捉完了のあかし

フクロウの赤ちゃんが六門島（ろくもんとう）にやって来ました。
どこかからか、紛れてきたようですね。
初めて見る猛禽類に、艦娘たちも興味深い視線を注ぎます。
白いカッターシャツと黒い半ズボンがよく似合う新一君が赤ちゃんを撫でると、その子は目を細めて喜びを表しました。
そこへ、すっと頭を差し出す大和。
最強戦艦は骨抜きになっています。
あらあら、とろんとした顔つきですね。
フクロウと同様、頭を撫でられる彼女。
ムフームフーという鼻息が聞こえます。

「後でいっぱいちゅーちゅーしてくださいね。」
小さな声で、新一君の耳元にやさしく囁きかける大和。
嬉しそうに嬉しそうに言いました。

日が落ちて、瀬戸の島も真っ暗です。
お風呂場には何名もの艦娘がいます。
すっぽんぽんの天龍が、木曾と一緒に浴場から出て来ました。
世界水準の大きなおっぱいが、ぷるんぷるんと震えています。
そこへ新一君が、お姉ちゃんたちと一緒に脱衣場へ入って来ました。
新一君は大和に抱っこされ、少し恥ずかしそうに見えます。
お姉ちゃんたちに服を脱がされている少年を見て、天龍は隣の木曾に小さな声で話しかけます。
「なあ、あれって過保護じゃないのか?」
「まあ、好きにやっているのだろうさ。」
「あんなちっちゃいガキによってたかって……。」
天龍は会話を続けられませんでした。
目を細めた艦娘が何名も彼女を見つめていたからです。

その視線はまさに猛禽。
捕食者。
深海棲艦の群れに何度も何度も果敢に突撃した天龍でさえ、それは金縛りにさせる程の威力でした。
彼女の妹の龍田さえ、ムーミン谷の寒い冬を思わせる視線を向けています。
それは一触即発の気配。
意識が吹き飛びそうになります。
ちょん。
阿部氏。
隣の木曾が秘孔を軽く突きます。
眼帯娘は意識を取り戻しました。
お姉ちゃんお姉ちゃんとやさしい声をかけられた艦娘たちは、あっという間にとろとろになってしまいます。
冬は過ぎ、雪解けが訪れました。
その好機を逃さず、世界水準のおっぱいを持つ軽巡洋艦は素早く言います。
「あ、まあ、姉なら弟を世話するのも仕方ねえな、姉ならよ。」
「まあ、そうなるな。」

とある航空戦艦の口調で軽く返し、木曾は艦娘たちを注視します。
喜悦を顕にしている娘らを。
まだ今のところは大丈夫か。
彼女は心の中で呟きました。

宿泊棟へ向かうべく、軽巡洋艦たちは廊下を歩いています。
「なあ、木曾。」
建設中の城塞を窓越しに眺めながら、巨乳の軽巡洋艦はマント姿の軽巡洋艦に話しかけました。
「なんだ?」
「お前、あのガキとおっさんとどっちがいい?」
「気になるのか?」
「んー、まあな。」
「あの坊やは龍田も気に入っているようだし、お前はあっちに付くのか?」
「あー、まだ考えちゃいない。」
「北上の姉貴が、どうやらあのおっさんを気にし出しているみたいでな。」
「へえ。」

「球磨多磨大井の姉貴たちは静観するつもりらしい。こわいのは、派閥が出来て俺たちが一枚岩で無くなることだ。」
「確かにな。だがよ、ガキとおっさんは仲がいいぜ。」
「そうだな、考え過ぎかもしれん。」
「俺たちが防波堤になるしかねえ。」
「武蔵か長門にでも相談しようか。」
「ああ、近いうちにそうしようか。」
そこへひょこひょこと、フクロウの赤ちゃんが近づいて来ました。
眼帯娘たちは、やさしくやさしく赤ちゃんを撫でます。
人懐こいケモノは目を細め、ホウ、とひと鳴きしました。

埴丸

「こちらの神様が埴丸（はにまる）様じゃ。」

「「「「埴丸様？」」」」

冬の昼下がり。

柄杓（ひしゃく）と桶と手拭いを持ったワシは大淀さん間宮さん長門さんに加え、なついてくれとる吹雪ちゃんとワシに興味があるとゆう武蔵さんを連れて六門島（ろくもんとう）北部のスサノオ山頂上まで登った。

山の名の由来は、高天原（たかまがはら）を追い出されたスサノオ様がこの山で腰かけて休んだことに由来するゆう話じゃ。

頂上に祀（まつ）られとるのは埴丸様。

なんでも、古い古い神様とゆう話じゃ。

古墳時代にはこの辺りに豪族が拠点を置いとって、その頃から埴丸様を祀っとったらしい。

見た目は素焼きの埴輪の兵士。
隣に同じく素焼きの馬がおる。
祠（ほこら）の中からこの島をずっとずっと守ってくださっとる、ありがたい神様じゃ。
「神様か。」
長門さんがじっと見つめとる。
その横顔へと話しかけてみた。
「艦娘さんたちも、ある意味神様じゃな。」
「そんな大層なものじゃないさ。」
長門さんの顔が赤く見える。
なんぞ緊張しとるんかのう？
ヒトの姿にありて、ヒト為らざるモノ。
ならば、それはなんじゃゆう話じゃな。
これ、吹雪ちゃん、下穿きが見えとる。
しゃがんだら、はっきり見えるんじゃ。
長門さんや武蔵さんの下穿きも見える。
おえんがな。

大淀さんと間宮さんが、何故かニヤニヤしながらこっちを見とる。
ワシは美人さんたちから目を逸らし、近くの泉で桶に水を汲んだ。
手分けして埴丸様と馬と祠をきれいに拭き、それは直に終わった。
霞ちゃんに握ってもらったおにぎりと蜜柑をお供え物にし、拝んでから山下りする。
昔話によると、昔樵（きこり）がここの泉で鉞（まさかり）を落としたそうな。
その時点で突っ込み感満載じゃが、その樵が嘆いておるとそれはそれはきれいなご婦人が現れたそうな。
狢（むじな）か狐じゃな、たぶん。
そいつらがおなごに化けたんじゃ。
お前が落としたのは金の鉞かそれとも銀の鉞かと、ご婦人は両手にそれらをたずさえて聞いたそうな。
二刀流じゃ。
坂田金時や三国志の徐晃もびっくりじゃ。
驚いた樵は、こう答えたそうな。
自分が落としたのは備中国重が丹念に打った鉞であって、実用性無く装飾品の金銀の鉞では仕事にならぬと。
がっかりしたかに見えるご婦人は元の鉞を樵に返し、金銀の鉞も正直者への褒美とし

て与えたという。
　そして、島を訪れた金持ちが金銀の鉞を高く買い取り、樵はきれいな嫁を得てこの島を長く繁栄させたそうじゃ。
　どっとはらい。
　泉の逸話を話すと、全員感心しとった。
　感心するような話かのう？
　右隣の武蔵さんが話しかけてきた。
「この小さな島にも、神話や逸話などが複数あるのだな。」
「近隣の島じゃと、少し前に獄門島で美少女姉妹連続殺人事件があったのう。」
「大事件じゃないか！」
「東京から探偵が来て引っ掻き回したとか事件を解決したとか、いろんな噂話が当時飛びかっとったのう。特に週刊文美春（ふみはる）のカストリ記者たちがどえれえしつこく関係者たちに付きまとって、全員魚の餌になってしもうたそうじゃ。なんでも、犯人が怒り狂って斧でどたまをかち割ったり紐でくびり殺したり毒を飲ませたりしたらしい。」
「そ、そうか。」
　左隣の大淀さんが意気盛んに話しかけてきた。

「提……じゃなくて喜作さん、埴丸様のお守りを作りましょう、お守り。海難防止、安産祈願、大願成就、学業成就、交通安全、などなど。巫女役は金剛姉妹や扶桑姉妹たちや手の空いた駆逐艦たち辺りに任せましょうか。」

「なんでもありじゃのう。」

明日は広島方面に船を出して、いろいろ買っておくかのう。

ぎょうさんぎょうさん買っとかんと、あっという間に備蓄が無くなるけえな。

知り合いの備前鍛冶に日用品を打ってもらっとるが、ええつ（あいつ）は気まぐれじゃけえな。

前を歩いとった吹雪ちゃんが転んでしもうた。

抱き起こしたワシは、ついつい口にした。

「間宮さん、今夜は湯豆腐がええのう。」

「はい、丁度今作っている豆腐が使えますね。」

よくわかっとらんらしい吹雪ちゃんは首を捻り、じゃあお手伝いしますねと言った。

「喜作殿、間宮に、今度かすてらとかの甘いお菓子を作ってもらってもいいか？」

一見無表情に見える武蔵さんが、ボソッとワシの耳元でそう囁いた。

追儺

追儺（ついな）。
節分の元になったと言われる、宮中行事。
岡山県南部は笠岡諸島にある六門島（ろくもんとう）でも、古風ゆかしき行事が行われようとしていた。
建設中の屋敷の正門上には、鰯の頭と柊（ひいらぎ）と木の実と松ぼっくりとで装飾されたトネリコの輪っかが飾られている。
電飾も無いのに、時折青く光っていた。
骨頭の妖精率いる装飾隊渾身の作品だ。
とある魔法効果が施されているという。
なんか違うのう、と思いながらも流されやすい気さくな喜作はまあええかとそれを受け流す。
そして、彼を鷹の目で見つめる艦娘たち。

見えない戦いは、とっくに開始していた。
鬼に扮するはおっさんと小学生の男の子。
赤鬼は冴えない中年、青鬼は麗しき少年。
桃の弓、葦の矢、桃の杖で武装した艦娘たちが彼らを追い回し、小豆を投げつけ、屋敷から追い払って逃走させるのが今回の催しである。
例年はおっさんが鬼となって少年が桃の弓で葦の矢を軽く放ち、桃の杖でとんとん叩き小豆を撒いて鬼払いするという簡単行事。
その後は『鬼餅』を作って仲よく食べるという寸法だ。それで追儺は終了する。
艦娘や学者たちの前でおっちゃんとぼんはそれらを予行してみせるが、何故だか全員からダメ出しされる。
ちょっこし残念に思う島の男たちだった。
結局、男性陣が鬼役で女性陣が払い役とすることに決まる。
カチューシャ状になった鬼の角を付け青い着物で扮装した少年は何名もの艦娘の魂を撃ち抜き、きゃーきゃーと賑々しく次々に抱っこされていた。
おっさんの方は泣いた赤鬼みたいだと、別の意味で注目されている。
こちらは江戸時代から使われている、強面風味の面をかぶっていた。
やたら気さくに接してくる北上からぺたぺたと触りまくられている。

隣にいる大井がおろおろするくらい、大胆不敵に全身を触っていた。
ついでとばかりに吹雪も触りまくっていたが、こちらは叢雲磯波白雪深雪が引き剥がしている。
ちなみに、初雪は望月と共にじいっとおっさんを見つめていた。
その後。
北上は大変優秀な長女の球磨に、力ずくで引っ張られていった。
今回投げるのは小豆を入れた小袋。
真心籠った手縫いの端切れの小袋。
炒った大豆を投げるのが節分では一般的だが、六門島（ろくもんとう）では小豆をそのまま投げる風習となっていた。
それは江戸時代中頃から始まったという。
その昔は小石や貝殻を投げていたという。
投げた後の小豆は翌朝拾ってよく洗い、これを潰し餡に加工し練った本葛の中に入れて笹の葉でくるみ蒸す。
出来た生菓子が『鬼餅』。
この菓子を食べればその年の無病息災が叶うという、島独自の伝統行事である。
餅菓子の名称から、琉球の伝統菓子『鬼餅（ウニムーチー）』との関連性も考えられる

が詳しくはわかっていない。
越前若狭能登などでは冬場に水羊羹を食べる風習があり、それが伝播したのではないかと某民俗学者はそう唱えた。
小豆を直接投げるのは勿体ないとし、間宮鳳翔などの料理上手たちが小豆を小袋に入れるように提案し採用された。
全国的に珍しい行事ということもあって、欧米型海外艦たちも興奮している。
祭を行うこと自体が初めての艦娘も多く、期待がどんどん膨れ上がっていた。
彼女たちは桃の杖を戦棍（メイス）みたいにぶんぶん振り回したり、弓の使い方を空母系艦娘たちから教授されていた。
駆逐艦たちはぶんぶんと棒切れの如き杖を振り回す。
戦艦級艦娘たちの持つものは、杖というにはあまりにも大きすぎた。
大きく
分厚く
そして大雑把過ぎた。
それは正に鉄の塊みたいに見えた。
特別許可を得た学者たちが、一連の行動を興味深く眺めたり喜作に徹底的な質問を連発したりしている。

陰陽師で民俗学者の柳井久爾夫は美人弟子兼助手兼恋人兼論戦相手の折井志乃らと共に、詳細な記録を行うのだった。

記録の合間に彼は折井へ向かい、「北南方君が生きていれば、大層喜んだだろうになあ。」と嘆息したという。

今回は備中だるまささげが比較的大量に安定して入手出来たため、それを用いることとなった。

ささげ（大角豆）とは小豆に似たアフリカ原産の豆で、国内では主に岡山県で生産されている。

浸水時間は三時間と短く、煮崩れしないのが特長。

追儺での甘味料は自然由来のものを使うのが決まりで、米飴水飴甘葛（あまづら）蜂蜜干し柿を使用する。

ちなみに甘葛は一月から二月始めの時期に蔦の樹液（みせん）を集め煮詰めて作るが、今回の樹液採取には奈良女子大学有志と酔狂系和菓子職人たちの協力があった。

蔦の切り口を直接舐めたり吸い込んではならぬ唇が腫れるぞと林業の専門家から口酸っぱく言われ、一月初旬から樹液採取の旅が始まった。

艦娘たちもこっそり手伝い、人海戦術の結果、そこそこの量の甘葛が完成する。

古代の稀少品系天然甘味料ということで、学術的に意義のある仕事なのだった。

夕刻、追儺が始まる。
誰そ彼（たそかれ）時に始めるのが島でのならわしであった。
大型作戦に臨むかのごとき表情で、歴戦の艦娘たちが鬼に向かって進撃開始する。
葦の矢が何本も放たれて、本来突き刺さらない筈の樹木や石などを容易く貫いた。
ぶんぶん振り回される太めの桃の杖は、風切り音が激しく周囲に土埃を起こした。
「こりゃあ、おえんが。」
これら戦慄の技を見た中年親爺の井東喜作は、愛くるしい鬼頭新一と二手に別れて逃げ出した。
生存率を高めるためでもあるが、本当ならば行う必要すらない。
追儺はそもそも、あっという間に終わる行事なのだから。
既に鬼らは屋敷から離れており、目的は達成されている。
その筈だ。
だが、えらく高揚した艦娘たちは興奮していてその判断が出来なくなっていた。
桃の杖が重厚な音を立て、空気を切り裂いてゆく。
その勢いならば、鎧兜さえも易々と砕けるだろう。
わりぃごはいねがーっ、わりぃごはいねがーっ、とばかりに艦娘たちは鵜の目鷹の目

で目標を探してゆく。
サーチ・アンド・デストロイ。
サーチ・アンド・デストロイ。
艦娘たちはうきゃーっ！　と雄叫びを上げながらおっさんと坊やを追い回す。
どちらが鬼だかよくわからない。
特に、大和や吹雪辺りが目の色を変え過ぎて酷かった。
美少女が台無しである。
研究者たちは目を丸くしながら、事態の推移を見守る。
それしか出来なかった。

「捕まえた。」
「いやいや、北上さん、追儺の鬼は捕まえるんじゃねえで。」
ワシは逃亡先の山中で、北上さんに捕まってしもうた。
何故かはあはあ言っとる。
走ってきたんじゃろうか？
なんじゃ、鬼を追い払う行事が山狩りみたいになってきとる。
ズルズルと茂みの中に連れ込まれた。

「司令官の匂いがする。」
吹雪ちゃんが近くまでやって来た。
なんか大変危ない顔をしとるのう。
「こっちだよ、吹雪。」
「あっ、北上さんに司令……喜作さん。」
右腕に北上さん、左腕に吹雪ちゃんがしがみつく。
この状態で矢を防ぐために寝転がる。
なんじゃ、これ。
新一は捕まって、どうやら風呂場に連行されるようじゃ。
討ち取ったりぃ、討ち取ったりぃ、と大和さんのうわずった声が聞こえとる。
これ追儺違うが。
どねえすりゃあ。
学者さんたちにはわりぃことしたのう。
「提督、吹雪、なんだか大興奮している子が少なくないからね。ここでじっとしてほとぼりを冷まそう。」
「それはいい案です、北上さん。」
「まあ、そうするのがえかろう。」

「追儺、って侘び寂びだよねぇ。」
ヒョオッ、ヒョオッ、と音を立てる矢の音が聞こえドスドスとどこかに刺さる。
葦の矢は先を丸めておいたんじゃがなあ。
きょおてえのう（作者訳：おそろしいのう）。
「あら、提督、こんなところにいたんですか。」
「ふふふ、提督の匂いがすると思ったらやっぱり合っていました。」
「ワシ、そげえにおうかのう？」
「いえいえ、臭くないです。」
大淀さんと間宮さんに、呆気なく見つかってしもうた。
何故じゃ？
「提……赤鬼を発見しましたっ！」
大淀さんがよう通る声で叫んだ。
彼女はヴァルター社のドイツ製信号拳銃を夜空に向かって撃ち、その炸裂音によって多数の風切り音がピタリと止んだ。
戦国時代の合戦みたいじゃ。
艦娘たちがようけにやにやしとる中を、建設中の屋敷へ戻る。
なんか、武田の忍者みてえな動きをしょうる子までおるがな。

北上さんと吹雪ちゃんがはあはあ言っとってでえれえこええ。
両腕がまるで万力で締められたみたいに痛くなってきょうる。
大淀さんと間宮さんがめちゃくちゃええ笑顔をワシに見せた。

建築中の要塞前にある広場ではかがり火が焚かれ、踊り明かす艦娘まで現れた。
盆踊りみたいな櫓（やぐら）があっという間に組まれ、櫓の上では那珂ちゃんが美しい声で東京音頭を歌い出し踊りの輪が出来る。
そして、太鼓を叩く子、笛を吹く子、尺八を吹く子にクラリネットやヴィオロンやマンドリンを演奏する子まで現れた。
やがて珈琲を主題とした、最新人気曲の『モリエンドカフェ』を那珂ちゃんは原語の西班牙（スペイン）語で歌い出し、祭は最高潮を迎える。
その後も『夜来香（イエライシャン）』や『熊祭（イヨマンテ）の夜』、『ベサメ・ムーチョ』、『リンゴ追分』、『お祭りマンボ』などを那珂ちゃんは高らかに熱唱した。
それはまさに歌姫の真骨頂。
彼女の夢は夜開く。
『トロイカ』や『カチューシャ』や『カリンカ』などはソヴィエト艦娘たちも合唱に加わり、やがて全員が熱唱していった。

長崎の出島を元に、六門島東部に設けられた扇状の人工島たる扇島（みしま）。
扇島は蘭船商館を主軸とする交易用の拠点であり、限定的ながら艦娘と外部の人間との交流をもたらす場所として期待が寄せられている。
近くの島から訪れた行商人たちがここで目敏く煎餅やキャラメルなどを売り始め、即席茶屋を始める者さえいた。
ラーメンワンタンシュウマイを、近隣の島の拉麺店店主が出張販売する。
わらわらと群がる艦娘たち。
お代は大丈夫ですよとの声に、始めはおずおずとやがて彼女たちは積極的に食べてゆく。
なに、代金は後であちらからもらえばいいさと商人たちは太っ腹な商いを行う。
彼女たちに感謝の気持ちを持つ者は、そこかしこにいるのだ。
これで恩義を返せるなら安いもんさね、とうそぶく商人たち。
国の方針に疑問を持ちながらも正面きった戦いは正直難しい。
ならば、可能な範囲でやれることをやったらいいと彼らは商売する。
岡山県人と広島県人の心意気ってもんを、見せてやろうじゃないか。
ちらし寿司を販売する店主まで現れ、朝日が昇るまで喧騒は続いた。

ハイカラなワッフルやクッキーの出店まで現れ、正月と盆がいっぺんに来たような賑やかさに艦娘たちはウキウキワクワクしながら時を過ごすのだった。

民俗学のために訪れていた学者たちは本来と異なる展開となった伝統行事に、これこそ新しい時代の始まりだと確信したらしい。

彼らの手には、近隣の島の和菓子屋主人手製のみつ豆があったという。

うおお、と激情がほとばしるあまりに相撲やパンクラチオンを始める娘まで出現し、しめやかに終わる筈だった伝統行事は思いがけない結果をもたらした。

翌朝。

作りたてのおいしい鬼餅を仲よく食べる艦娘たちの中に、がに股で歩きながらもへらへら笑う吹雪と北上がいたという。

少年はきらきら輝ける鬼頭艦隊の艦娘たちと共に、既に元気はつらつと船で登校している。

おっさんは腰を痛めて寝込んでおり、昨夜は追いかけ回して悪いことをしたと反省する艦娘たちが多かったそうな。

とっぺんぱらりのぷう。

扇島

扇島（みしま）。
岡山県笠岡諸島にある六門島（ろくもんとう）東部へ設けられし、扇型人工島。
建築妖精たちの本領を発揮した『作品』のひとつで、六門島とは表門橋で繋がっている。
艦娘が唯一、島外の人々と交流可能な場所として建設された。
扇島の大きさは、北側と南側がそれぞれ七〇メートル、東側が二三三メートル、西側が一九〇メートル。
およそ四〇〇〇坪で、一・五ヘクタールの面積を有する。
艦娘を籠の鳥とし飼い殺しすることが当たり前だと考えていた日本政府は、人権保護団体や野党や艦娘支援会などからの激しい批判追求が相次ぐ状況に辟易した。
そんな政府高官たちは、おためごかしに外部者との交流用人工島を提案した。
江戸時代の長崎出島が頭の中にあったのだろうか。
妖精たちはそれを逆手に取って、真田丸的な要衝を築き上げつつある。

用意周到にも、建築許可までさりげなく取得して。
扇島の中心的施設は和蘭商館。
長崎出島のオランダ商館を参考にしたらしい。
目ざといオランダ商人のヤン・ファン・マウリッツが『マウリッツ商会』を立ち上げ、この商館を拠点と定めた。
機に敏なオランダあきんどの面目躍如である。
日本政府は始めこれを禁止しようとしたのだが、欧州の貴族や財閥などからの度重なる外圧によってあっさり認めた。
これにより、日本は外交三流国であることを改めて世界へ知らしめることになる。
商館内装の壁紙や天井には和紙に木版で連続模様を刷った唐紙（からかみ）を用い、出島風古典的ビリヤード台も二台置かれている。
一階には洋食屋の『ヘトル亭』があり、艦娘も利用可能だ。
ちなみにヘトルとはポルトガル語で商館長次席のこと。
また商館傍には、保管所としての土蔵が複数作られた。
鹿鳴館を参考にしたと思われる『はいから館』が現在建築中であり、島外の人々と艦娘との社交場として期待されている。
一階には洋食屋の『クルティウス亭』があり、こちらも艦娘も利用可能。

扇島内の畑ではチューリップを栽培する予定で、薬草園と菜園も築かれている。
近いうちに日蘭風菓子屋の波留麻屋が開店する予定だ。
マウリッツの片腕であるファン・レーケとその部下のエッセルは、改めて艦娘たちの美しさに驚いた。
「なんてこった、パリよりも美人が多いじゃないか！」
「ここに来て、ホントによかったなあ。」
「ああ、まったくだ。」
「ところでだな。」
「なんだ？」
「彼女たち、何故ショベルやピッケルなどを装備しているんだ？」
「ああ、なんでもクズモチとやらを作るためにクズバインの根っこを掘りに行くんだってさ。」
「旨いのかねえ？」
「食べたらわかるさ。」
「それもそうだな。」

甘葛（あまづら）作りで味をしめた艦娘たちとおっさんと少年は、次に本葛粉作りへ

取りかかった。
最終的にそれは葛餅になる予定だ。
葛粉という名のトウモロコシや馬鈴薯などの澱粉でない、本物の葛粉つまり本葛粉を手作りするのだ！
旨いものを食べたいという気持ちが、意気軒昂に繋がるのである。
例によって例の如く、人海戦術でむにゃむにゃした一行は葛が生えて困った土地へと艦隊を次々に派遣した。
こういう名目なら島外に出られるのは盲点だった。
葛に困った人たちは助かるし、島の住民たちは旨いものを食べられる。
これぞまさに二者両得だ。
よかたいよかたい。
前回参加した数奇者たちや和菓子職人などもちゃっかり参加している。
葛に詳しい霞・間宮・鳳翔・伊良湖などの各隊に別れ、葛だらけの荒れ地に向かう。
日本全国に荒れ地は多い。
至るところ、クズだらけ。
葛よ、葛。みんなクズよ。
葛掘りは重労働だが、人を超えた力が振るえる艦娘たちにとっては丁度いい仕事だ。

掘られた葛の根はほんのりと甘い匂いがして、葛餅を早くも連想した食いしん坊万歳たちがわくわくする。

葛の根は丈夫な繊維質を持ち、静岡県にはそれを使った『葛布』という工芸品さえある。

かなりの量が集められたので、根はけっこう多い。

本葛粉を作った後、葛布作りに取りかかろうという話になった。

葛の根を搾って出た白っぽい液は翌日真っ黒な液に変わり、その上澄みを捨てて本葛粉精製作業が開始される。

精製を終えたら天日干し。

高揚する面々。

では葛餅を作ろう。

粉の五倍の水で溶いて、弱火で加熱して固まってきたらこれを冷やす。

固まった澱粉は水溶性が無いので、氷水にそのまま浸けても問題ない。

冷えたら、きな粉と黒蜜をかけて召し上がれ。

葛湯を飲みながら、ワシは喜びに沸く艦娘たちを見てほっこりした気持ちになる。

「しれいかーん！」
走ってきた吹雪ちゃんが、ワシに抱きついてきた。
甘えん坊さんじゃのう。
おうふっ、そげなとこをぐりぐりしたらおえんが。
「ふふ、司令官の弱点発見です。」
「男なら全員漏れなく弱点じゃ。」
「葛餅ってさ、侘び寂びだよね。」
北上さんが後ろから抱きついてきた。
おうふっ。
付けとらんがな、この子。
ぐりぐり押し付けてくる。
「今夜もいっぱい仲よくしましょうね。」
「そうだね、仲よくするのはいいよね。」
両方の耳から囁かれ、ワシは震えた。
どうやら、今夜も大変なことになりそうじゃ。
ふう。

野草

一九四三年、陸軍獣医學校研究部が『食べられる野草』という書籍を出版した。
今回はこれを参考にして、あちこちに生えている雑草野草を入手して食料にする魂胆だ。
無料。
それはなんと素晴らしい言葉なのだろう。
資金自体は欧米でのオークションを通じて入手しているが、やはり無料の誘惑は抗（あらが）い難い。
なにより、人海戦術が使えるのだ。
これを利用しない手はない。
芹、薺（ナズナ）、ハハコグサ、ハコベ、ホトケノザ、ギシギシ、スイバ、野蒜（ノビル）。
冬の野草も割合多い。

食料を求めるため、かつて精強を誇った艦娘たちの艦隊が嬉々として野山や河川敷を駆け巡る。
欧州から訪れし諜報員兼任の商人たちはその状況を見て呆気に取られつつも、詳細に報告書をまとめて本国へと送るのだった。
まるで、普通の女の子みたいじゃないか。
日々生きることに懸命なだけじゃないか。
そう思いながら。
現場と会議室の温度差は埋まること無し。

広島県愛媛県香川県など近隣諸国の数奇者たちが集まった、岡山県笠岡諸島は六門島（ろくもんとう）東部にある人工島の扇島（みしま）の広場。
寒空の下、熱気溢れる人々とツクリモノの娘たちが野草試食会を開催する。
「これはまるで春の七草じゃのう。」
「おじさん、これおいしいですよ。」
島の元々の住人である井東喜作と鬼頭新一には、真っ先に粥が振る舞われた。
七草粥を土台にした中華粥である。
瀬戸内海の海の幸も入っていて、慈味豊かだ。

粥の入った大鍋の近くでは近隣の料理人やテキ屋たちによる屋台が並び、縁日に似た雰囲気が醸し出されている。
任侠の面々は艦娘たちに対して侍が主君の姫に対するような心持ちで接しており、畏敬の念さえ感じられる程だ。
意外かもしれないが彼らは結構信心深い面を持っており、採算度外視で艦娘たちへ屋台の料理を振る舞っている。
荒くれどもが感じ入るそれは、艦娘たちの菩薩にも似通った気配なのかもしれない。
敬虔な異教徒たちに困惑しつつ、濃いめの味付けにしてもらった中華粥を食べる南蛮人たち。
不思議な食感の穀物に野生の香草。
シーフード風味のリゾット的料理。
紅毛人辺りなら喜ぶかもしれない。
幸い、彼らは食に柔軟なのだった。
たまには肉料理を食べたいと思い、のんびり周囲を歩く山羊に目を向ける。
乳とチーズを生み出す存在。
駆逐艦の艦娘が撫でると、目を細めてメエメエ鳴きだした。
じっと眺めていた彼らへと、不意に猪の腸詰めが渡される。

添えられているのは、潰し馬鈴薯に酢と塩を振ったものだ。
視線の先には喜作。
気さくなおっさん。
「あんたらの国の味とは違う思うんじゃけど、こちらで手作りしてみたんじゃ。食べてみられえ。」
素朴な形の腸詰め。
焼かれたそれは、芳香を放っている。
おそるおそる食べてみた彼らは、思った以上の風味のよさに驚愕した。
どうやら、香草も入っているらしい。
潰し馬鈴薯もホクホクしておいしい。
「野草も入れてみたんじゃけど、どうじゃろうか？」
オランダ語など喋れよう筈も無い喜作は、お国言葉丸出しで話しかけた。
「トテモオイシイデス。」
「ハーブガキイテイテ、コレハヨイモノデスネ。」
「おお、気に入ってもらえてなによりじゃ。まだまだあるけえ、沢山お食べんせえ。」
この男が、本当に脅威になるのであろうか？
なにか我々は勘違いしているのではないか？

オランダ人たちは腸詰めのお代わりをしながら、遠い本国へと思いを馳せるのだった。

春はまだ少し遠い。

軟骨

肉をとても食べたい。
兎に角多く食べたい。
そういう要望が、艦娘たちから上がってきた。
猪や鹿や熊などの駆除を経て入手した肉は思った以上に好評で、内臓も食べられる部位は余すところなく消費された。
安価で大量購入出来て、しかも旨い肉。
そんな好都合な存在があるのだろうか？

結果から言うと、あった。
沖縄からの移住者が多い、兵庫県尼崎市の精肉業者が教えてくれたのだ。
彼はたまたま立ち寄ったこの六門島（ろくもんとう）で新鮮な刺し身を振る舞われ、お礼にと情報を与えてくれたのである。

直ちに、岡山県南部の笠岡諸島にあるこの島からお肉調達艦隊が派遣された。
旨いもののためには力を惜しまない。
しかも安かったら、素敵やんか！
そういう方針になりつつあった。
そういう認識になりつつあった。
監視している者たちは、個人的に今度なにか差し入れしようと考えるのだった。

肉は豚肉。
ホルモンと呼ばれる内臓を基本肉として、豚バラ先軟骨やタン下や豚ガラも多数得られる。
島へ運ばれた肉は腸詰めや燻製にされる部位を除き、次々タレに浸けられたり焼かれたり煮られたりした。
豚ガラはスープにされる。
間宮鳳翔らが、肉じゃがやボルシチを作ってゆく。
豚バラ先軟骨は豚ガラよりも少し高い値段の部位。
タン下は通称で、豚の舌の付け根のこと。
「このタン下は、揚げたらうめえんじゃねえかのう。」

中年男の喜作がそう言うと、揚げ物上手な龍田や足柄が醤油と日本酒とで下味を付けて龍田揚げや唐揚げを作り始めた。
揚げたてを口にすると、すこぶる旨い。
肉の弾力、旨み、肉汁が口中に広がる。
血の味がして、肉肉肉って感じがした。
さっぱりした浅漬けやキムチと共に食べると、ご飯がどんどん進む。
軟骨も火がしっかり通っていて、こりこりして旨い。
龍驤が七輪でタレに浸けられたホルモンを焼き、それを周囲に集まった艦娘がわしわし食べる。
大和は挽き肉を作り、それを中華風揚げ団子にして愛しの新一可愛い小学生へと振る舞う。
武蔵とビスマルクはハンバーグを焼き、サラトガやアイオワはそれをハンバーガーにした。
フランクフルターなヴルストを挟んだホットドッグもある。
まさに、肉肉肉の食事になった。
島周辺の人々も巻き込んで、旨い旨いの合唱が行われる。
おいしいことはいいことだ。

よかたいよかたい。
豚バラ先軟骨も唐揚げと化して振る舞われる。
大根と一緒に煮込んだものもうまかっちゃん。
こいうまかこいうまかと連呼する娘さえいる。
素麺を加えてにゅうめん化しても相性がよか。
骨ごとばりばり食べる艦娘たち。
沖縄そばまで出てきて、いよいよ宴は混沌化してゆく。
なんくるないさー、なんくるないさー。
香川県から来た人が何故かうどんを作り始める。
ラーメンを作る者までいた。
もうなんでもありって感じ。
日が落ちてゆく。
気分は高揚する。
いつの間にやら屋台や櫓（やぐら）が組まれ、那珂ちゃんが歌い出す。
彼女の周囲で踊り出す娘たちもいて、祭は最高潮を迎えんとしていた。
以前、京都で食べたきつね丼を提供する。
肉をがしがし食べているのだから、こういうさっぱりした丼物もえかろうで。

島製の蒲鉾、細切りの油揚げ、長葱を薄味の丼汁でさっと煮て丼飯によそう。
吹雪ちゃんや北上さんらがてきぱき手伝ってくれたんで、連携が取れとるわ。
流石は、艦娘じゃ。
間宮さんや鳳翔さんたちが、密着して食べ物を勧めてくる。
吹雪ちゃんや北上さんもあちこち触って悪戯してきょうる。
旨いやらくすぐったいやらで困るがな。
甘酒や日本酒なども出され、宴会が始まった。
これでえんかい。
なんてな。

襟巻

岡山県南部に位置する笠岡諸島の六門島（ろくもんとう）。
その島で喜作と新一を守護せしケモノたちの統括役たるニホンオオカミの六郎丸と巴は、人間風に言うと大層困惑していた。
その原因は狐の赤ちゃん。
いつの間にか、島にいた。
彼らの警戒網をすり抜けて島にいる。
フクロウの赤ちゃんもそうだったが、なにやら異変が起きているのかもしれない。
ヒトの言葉が話せないとは、こんなにもどかしいことなのか。報告すら出来ない。
その当の赤ちゃんは、疑うことを知らないのか六郎丸と巴に随分となついている。
人なつっこい個体なのかもしれない。
守護者たちの困惑は続く。

大淀さんが手編みの手袋をくれた。
間宮さんが手編みの帽子をくれた。
さっそく装備してみる。
うん、ぴったりじゃが。
まだまだ寒い日が続きょうるけえな、なんじゃあ、洒落た言い方をすると早春賦というやつかのう。
狐とフクロウの赤ちゃんがやってきて、フクロウはワシの肩に止まり、狐はワシの天然襟巻となる。
まだまだ風邪の冷てえ日がちょくちょくあるけえ、あったけえんは大事じゃ。

恒例となりつつある、『食べられる野草』探し。
今回はオカジュンサイとも呼ばれるギシギシが対象だ。
なんせそこかしこにある雑草めいた野草が、蓴菜（じゅんさい）のように食べられるというのだ。
無料と手間暇を天秤にかけ、今回も無料が勝ってしまった。
負けを知りたい。

『極力柔らかめの新芽』という条件で、かつてあの華々しい軍艦マーチで見送られた歴戦の艦娘たちが嬉々とした表情で野の草をむしる。

その姿を彼女たちの上司だった提督たちが見たならば驚愕するだろうか、或いは自ら参加するだろうか。

おっさんや子供と共ににこにこしながら収穫に励む少女たちの表情に、少なくとも迷いなど見られない。

ハーベスト！

あちこちで取ってきたら、よく水洗いして茶色い薄皮を丁寧に取り除く。

その後、毒性を除去するべく、塩水で茹でてゆく。

茹でたら醤油をかけて召し上がれ。

天麩羅にしたり、蕎麦の具にしたり、お吸い物にしたりして口にしてゆく。

異形の娘たちは、同時期に摘んだカラシナのお浸しも併せて食べていった。

お気に召した艦娘がちらほらいたようで、再度探索に出掛ける娘までいた。

喜作はそれを見て、新しい収入源を考えるのであった。

あちこちの島や漁港でダメになったボロ船や老朽船は何艘かタダで貰ってきた。

明石らに頼めば、復活する船が複数あるかもしれない。

腹が、減った。

くうっと鳴る。
今度あんこう鍋が食べてみたいもんじゃと彼は思った。

小粒の大豆を比較的多く入手出来たので、手作りの納豆を作ろうという話になった。
艦娘によって得手不得手はあるものの、栄養価の高い発酵食品を見逃す手などない。

島で特産品や物産を試行錯誤したりしながら材料探しするのが、艦娘たちの日課だ。
藁集めに勤（いそ）しむが、時期的なせいもあるのか稲藁がなかなか入手出来ない。
中年の喜作が「ススキでもええんじゃないのか。」と言い出したことから方向転換。
枯草納豆の製作が始まった。
大豆を一晩水に浸し、圧力鍋で加熱。
枯草を二度煮してにおいを取り、藁づとを作って煮豆を入れる。
四〇度で丸一日温め続けると完成だ。
現物を見た艦娘たちの歓声が上がる。
よろしい、ならば実食だ。
苦手な者もそれなりに食べられる、好きな者はけっこう好む味わいに仕上がった。
なにか方向性が明後日の方に向きつつあるように見えないでもなくなりつつある。

喜ぶ娘たち。
喜ぶ男たち。

約一週間後。
出島的な扇島（みしま）に住むオランダ人たちから多様なお菓子の詰め合わせを沢山貰い、艦娘たちは文字通り狂喜乱舞した。

舟艇

海の幸豊富な瀬戸内海。
その岡山県領域に位置する笠岡諸島。
真鍋島や獄門島などのある中に、六門島（ろくもんとう）と呼ばれる島がある。
そして今、その島ではあちこちで貰ったり破格値で購入した廃船的各種舟艇（しゅうてい）の大改修工事が行われていた。
その指揮を取っているのは明石。
従うのは手先の器用な艦娘たち。
ちまちま集めていた資材を投じての大仕事である。
町工場のような作業場は工廠と称していたが、明らかに鎮守府のそれとは比べ物にならない規模のものだ。
きちんと政府にも許可は取ってあるから問題ない。
許可を得ようとした時の、権力の走狗たちの態度は噴飯ものだった。

いや、こう言っては狗が可哀想だ。
そう、外道。
彼らは外道。
古典的な任侠の人たちが最も嫌いし、外道。
役人たちはまごうことなき外道集団だった。
インケツな政府の木っ端役人たちは散々嫌みを言いながら、国の英雄たちにするべきではないような態度を取り続けた。
自分たちの方がずーっと偉いもんね、というまっことあほうな態度を取り続けた。
当事者の艦娘や喜作や新一よりも、監視役のオランダ人たちや間諜たちの方が激怒していたのは印象的であった。
何故彼らがそんなに怒っているのか、島の者たちが戸惑う程だった。
そんなことがあったが、現在絶讃全力投球作業中だ。
熱気の立ち籠る工廠はかなり暑く、水着着用の艦娘などはまだマシな姿の方だった。
「ほれ、あんたら、差し入れじゃ。」
そこへ、島のヌシの気さくな喜作がやって来た。
彼の手には手搾りの蜜柑果汁水がある。
わーっと彼のそばに寄っていく娘たち。

半裸に近い者もいて、おっさんの目には毒であった。
ごくごくと、喉を鳴らしながら飲んでゆく少女たち。
あと数日で全舟艇の一応の改修が終わり、試験運用を行えるという。
シャカリキになっただけのことはある。
誇らしげに胸を反らす明石。
顔を赤くする喜作。
「その、明石さん。見えようるで。」
「はい？　なにがですか？」
「その、あんたのお乳じゃが。」
「ああ、おっぱいですか。見ます？」
着ていたシャツを脱ぎ出す明石。
プッと吹き出すおっさん。
上半身になにもまとわなくなった彼女は、にこにこ微笑んでいる。
「ああ、脱ぐと涼しくなりますね。」
「お、おう、そうじゃな。」
「どうされたんですか、喜作さん？」
「う、うん、儂はあんたらのことをもっと理解せにゃあおえんと思うてな。」

「あの、前屈みになられていますが、どこか悪いんですか？　修理しましょうか？」
「あ、あんな、人間は修理するんじゃなくて治療するんじゃ。」
「ああ、人間はそうでしたね。では撫でればいいですか？　『手当て』は人間にも効くと思いますが。」
「撫でられたら、昇天するかもしれん。」
「えっ、それはいけません。すぐ診療を。喜作さん、脱いでください！」
「も、ものの喩えじゃ！　大丈夫！　大丈夫！」
わらわらと半裸の少女たちがおっさんの元に集まってゆく。
口々に心配する声。
おっさんに危機迫るの巻。
喜作の顔は青くなりゆく。
明石は必死になってゆく。
そこへ北上がやって来た。
彼女も工廠要員として大車輪的活躍中。
彼女の姿も明石とどっこいどっこいだ。
「提督。ちょっと用事があるからこっちに来てよ。」
「あのう、北上さん。喜作さんは下半身に問題が生じているようなのですが。」

「大丈夫、大丈夫。出すもの出せば、治るから。」
「は、はあ。」
「確かに『目の毒』ではあるから、気の毒でもあるかな？」
「北上さん、はよう向こうへ行こう。」
「おお、提督、今日は積極的だねえ。」
「ワシ、そげえにギラギラしとるか？」
「ううん、いつもはとっても紳士的だけど一旦変わると野獣になるよね。」
「そこはなんとも否定しきれんのう。」
「あの、本当に本当に大丈夫ですか？」
「ああ、明石さん、でえじょうぶじゃけえ、なんも心配せんでもええんじゃ。」
「私に出来ることがありましたらなんでもしますから、お気軽に言ってくださいね。」
「よかったね、提督。なんでもしてくれるって。」
「言葉の綾じゃ。付け入ったらおえん。」

翌朝、明石はすっきりした顔の喜作に出会えたので心底喜んだ。
提督に近い位置にいる人物が無事なのを喜ぶのは、艦娘の基本。
戦時中は殆どの提督たちから知らん顔されていたがここは違う。

大淀間宮吹雪北上と一緒なのはいつものことだが、吹雪型駆逐艦や球磨型軽巡洋艦たちは少しさみしい思いをしているらしい。
それは大和を始めとする、新一少年の周囲にいる艦娘たちの姉妹艦たちにも言えることだ。
なにが起こっているのだろう？
自分の剥き出しの胸部を見て、喜作さんは動揺していた。
何故なのだろう？
もしかして、触りたかったのだろうか？
入浴していると、他の艦娘から触られることがある。
そうなのだろうか？
統合された同姿艦の記憶を探っても、理由が判明しない。
大体売店か工廠に籠ってばかりで、提督や人間との交流など殆ど無かった。
大抵は同僚の大淀から連絡が来て、その指示に従ってばかりなのであった。
そうだ、大淀に相談してみよう。
彼女は常に喜作さんの傍にいる。
少し気楽になれた明石は工廠へ向かう。
早く、全舟艇を実用可能状態にしたい。

それが今の自分の任務。
自分に与えられた仕事。
艦娘たちがいつも明るく過ごせるように、全力を尽くすのだ。
後方支援に徹していた自分に出来る、それは誠意ある仕事だ。
ふと思った。
喜作さんと一緒にお風呂に入ってみたら、なにかわかるのではなかろうか？
よし、今夜にも試してみよう。
大淀にはその後で相談するか。
何度も何度も試すことが当たり前な明石にとって、それは何気ない考えだ。
足取り軽やかに彼女は工廠に到着し、早速作業に取り掛かる。
そう言えば、喜作さんに興味津々の艦娘もいたわね。
彼女たちも誘ってみるか。
黒板にさらさらとそれらを暗号で書き記し、よしと頷いてぼろ船だったとは思えない程に仕上がりつつある舟艇を愛おしそうに撫でた。
喜作さんを撫でてみたら、いや撫でてもらったらどうなのかなと研究心を起こしながら。

北壁

最速駆逐艦と謳（うた）われた島風。
なんとか戦後を迎えた彼女は四代目。
初代は鉄底海峡に於ける戦艦棲姫との戦いで勇猛に突撃し、そして共に沈んだ。
二代目は激しい追撃のあった夜間撤退戦にて殿軍を請け負い、人知れず沈んだ。
三代目は仲のよかった長門を庇い、大破した身体で突撃し、敵旗艦の中枢棲姫を黄泉への道連れとした。
四代目の彼女は最終決戦で獅子奮迅の戦いを見せ、轟沈寸前になりながらも意識を失うまで戦い続けた。
最速の艦艇にして、鬼神の如く勇猛果敢な駆逐艦。
それが、島風である。
平和。
それは誰もが望んでいた筈の世界。

渇望されていた美酒。
だが。
島風は違和感を感じていた。
平和が厭という訳でもない。
呉鎮守府に他の艦娘たちと一緒に押し込められた時も、特に不平は感じなかった。
たぶん、解体されるのだろうと考えてさえいた。
実際の艦艇でも保存されるモノは僅か。
不要になれば標的艦。
バラバラにされて復興の手助けになること
もある。
それが生き残った艦の定め。
多大な功績があろうと保存運動が行われようと、用無しの猟犬は煮られてしまうのだ。
だが、そうなってもかまわないとさえ、彼女は思っていた。
ドイツ艦娘から聞いていた、ヴァルハラとやらで永遠的闘争を繰り広げるのだと夢想したものだった。
だがしかし、現実はどうだ。

白馬に乗った王子ならぬ、ボロ船に乗ったおっさんがやって来て島へと連れ去られてしまった。
島風からすると、彼はドイツ艦娘から聞いた魔王だった。
スツーカ乗りではなく、シューベルト作曲の方の。
殆どの艦娘が彼もしくは彼の甥っ子を受け入れていた。
あの長門でさえ、認めている節がある。
死地でこそ艦娘は輝けると考える島風にとって、海の幸豊富で戦後の輝きに包まれた瀬戸内海の孤島は緩やかな死を待つ監獄のように思われた。

島風の朝は早い。
手早く柔軟体操を済ませ、岡山県は笠岡諸島の六門島（ろくもんとう）を走り回る。
速きこと、島風の如し。
彼女の速さに近づける艦娘は殆どいない。
「おー、あんたはいっつもはええのう。」
「おうっ！」
島のヌシである、気さくな喜作が不意に彼女の近くに現れた。
驚いた彼女は挨拶ともなんともつかぬ声を出す。

だが、彼は気にした風も無い。
神社へお詣りに行っていたのだろう。
島風は彼が苦手だった。
いつも艦娘たちのことを気遣い、艦娘のために怒り泣き喜ぶことの出来る男。
提督にさえ、彼のような男性は滅多にいなかった。
いても、さっさとあの世へ旅立っていた。
苦いものが喉元へとこみ上げてくる。
魑魅魍魎がすがってくる幻覚さえ感じる。
彼女は口内で真言を唱え、邪気を振り払った。
我は最速。
我は一騎当千。
死をおそれぬ戦乙女。
この男は北壁（ほくへき）。
ドイツ艦娘から聞いた、アイガー北壁。
きっと、超えてみせる。
それこそが艦娘としての意地。
矜持。

「おじさん、かけっこする?」
挑発的に微笑みながら、島風は問うた。
だが。
いつものように中年は曖昧に微笑んだ。
「いやあ、ワシはあんたみてえにそげえにはよう走れやせんけえおえんわ。」
「ふふん、戦う前から諦めるなんて男らしくないわね。」
「こらえてくれんかの。そうじゃ、これはみんなには内緒じゃ。」
ひょいとどこからともなく蜜柑を取り出し、島風に渡すとおっさんはひょこひょこと去っていった。
まるで手品みたい、と彼女は思う。
怒気を放っても巧みにかわされる。
覇気なんてまるで感じない、そんな男に巧妙に。
ちょっと酸っぱい蜜柑を食べながら、彼女はまた誤魔化されたと思った。
でもそんなに悪くない、と不思議な感情に包まれ、もう少し生きていてもいいかな、と考えるのだった。
瀬戸の朝陽を浴びながら。

洋琴

感情論をぶつけあって、潰し合いをするのは愚の骨頂。
少数を是として、多数を全否定するのもまた愚の骨頂。
理知的且つ論理的に議論することの出来る者たちは案外少ない。
議論することよりも全否定することばかりに燃える者たちは、自分たちを助けてくれた存在が孤島に押し込められひっそり暮らしていることに激昂した。
或いは、そういうふりをした。
国会でも野党が珍しく連携し、与党を追及する。
証人喚問が行われ、大本営に勤務していた人間や提督と呼ばれていた人物たちが証言してゆく。
彼らは責任転嫁がお家芸の日本人として、複数の関係機関に散々飛び火させた。
浮気が発覚したり、横領が発覚した者も現れてしまった。
被害拡大を防ぐため、与党は艦娘たちへささやかに支援することを決定した。

識者たちの意見と実態調査をまとめ、それが『完了』次第、『比較的速やかに』支援を行うことと定めた。

全国各地で廃校になった学校は、意外と多い。

人口が緩やかに増えつつあるとは言え、世界的に穿（うが）たれた傷痕が癒えるには少なくとも半世紀を要すると言われている。

壊滅的な打撃を受け、国家の形を保てていない地域から日本政府への支援要請が相次いでいた。

艦娘を派遣して欲しいと懇願する人々さえ数多くいた。

世界が再出発するのにはまだまだ相当の時間がかかる。

子供の数が増えて欲しいものだが、実態としてはそれに程遠い状況だ。

岡山県笠岡市南部にある、笠岡諸島。

そこにある六門島（ろくもんとう）。

廃校になった学校の関係者から、机や椅子は必要かとの打診が島の喜作へ行われた。

気さくな喜作はこれを快諾し、ついでに楽器も送られてくることになる。

それはかなりの年代物。

廃校と共に処分予定の品々だったが、捨てるよりも活かす方をその人物は選択する。

結果、島には古いドイツ製のグランドピアノが送られてくる結果となった。
日本語にすると洋琴。
色褪せた楽譜も多数送られる。

喜作がピアノを弾けることを知った時、艦娘たちは驚いた。
冴えない感じのおっさんが、繊細な曲を奏でる。
それはまさに驚愕の事態。
早速、アイドルの那珂ちゃんは伴奏をせがみ、喜作の弾く曲に合わせて歌うのだった。
歌舞音曲を禁じられていなかったのも幸いした。
やさしい旋律。
おっさんの元へ駆逐艦たちが集まり、それは先生と生徒の関係に似たものを生み出してゆく。
その中には島風や曙霞満潮といった娘もおり、喜作はぎこちないながらも彼女たちと音楽を通じて交流するのだった。
赤とんぼ
荒城の月
椰子の実

そういった、日本の名曲が歌われてゆく。
急遽即席音楽教師になった那珂ちゃんが手本として歌い、それを駆逐艦たちが真似していった。
青葉と衣笠がそれを取材し、数々の制限の隙間をぬって外部に発信する。
美談を好む報道機関各社が、政府に取材許可を打診した。
政府は渋る。
美談がやがて政府への非難に変わるのをおそれたからだ。
最近は城を作っているらしい。
大したことの無い代物らしい。
中世の城郭を参考にしているという話である。
政府は特例法を楯にし、取材を却下し続ける。
将来のことなど、ろくに考えず。
艦娘たちの待遇改善に目を背け。
国の安定を図るのが先決と宣い。
適当なザル政策を乱発してゆく。
不意に現れる外圧に怯えながら。
その中に、艦娘たちを慮（おもんはか）ったものは何一つ存在しない。

喜作の周りには、多国籍の駆逐艦や海防艦が集まるようになってきた。
人間不信の娘たちも徐々に彼へ心を開きつつある。
善意の塊である喜作を支持する彼女たちは、時に彼を司令官または提督と呼んでしまう。
それは明らかに過ちではないかとも思われたが、それがしっくりくる娘もいた。

桜の舞う島で風が吹く。
新たな予兆を秘めつつ。
膨らむは新芽。
夢溢れる新芽。

焼鳥

焼鳥。
または焼き鳥。
それは、鶏肉をくまなくおいしく食べる方策のひとつ。
塩派とタレ派とが、果てしなき抗争を繰り広げている。
皮から内臓に至る様々な部位を切り刻み、串に刺し、団扇（うちわ）であおぎながら焼いてゆく。
それが焼鳥。
岡山県南部の笠岡諸島の六門島（ろくもんとう）は現在、焼鳥祭の真っ最中であった。
欧州でなにやらいろいろと売れたお陰らしい。
大量の鶏や鳥類、山羊や豚や牛などが島に運び込まれた。
けものなフレンズの公園まで作れそうな程の勢いだった。
島の主たる気さくな喜作を始め、給糧艦や腕自慢の艦娘たちが獣の肉を焼いている。

溶鉱炉の如く真っ赤な夕焼け空に、煙がたなびいていた。
鶏肉の骨を使って出汁が取られたポトフも提供され、ハイカラじゃなと焼いている合間におっさんはハフハフ言いながら汁物を口に運んでもらっている。
匙と椀を持った、お世話役の大淀はにっこりしながら彼に密接する。
喜作の隣にいる間宮はさりげなく胸を当ててくるし、吹雪や北上は手伝う中で自然な風を装ってぺたぺた触ってくるため、彼は若い娘たちの悪戯にひたすら困惑するのだった。
おじちゃんおじちゃん先生先生司令官提督と、彼が音楽の先生を行うようになってから親密化した幼げな艦娘たちが、純粋な好意を向けてくる。
彼によじ登る艦娘まで現れた。
提督さんたちもこげにすりゃあよかったんじゃねかろうかのう、と思いつつおっさんは彼女たちへ笑顔を向ける。
彼の甥っ子である新一は大和を中心とする護衛艦群に囲まれ、ちやほやされていた。
長門や武蔵辺りからするとあれはどうかなと思えるのだが、興味津々で彼らを見つめる艦娘が増えてきているのは事実だ。
喜作と対策会議を何回か行っているが、男性二人の人柄や性癖趣味嗜好などを艦娘たちから聞かれる機会が増加している。

新一がうっかりお姉ちゃんみたいな人がいいと口を滑らせた時は、お姉ちゃん艦娘が急増したものだった。

おませな駆逐艦たちが「私がお姉ちゃんだよ！」と言いながら少年に肉薄し、他の艦種の子に撃退されていた。

青葉衣笠姉妹が独自に発行している壁新聞の『喜作さん新一君速報』は、かなりの好評を博しているとか。

ちなみにその壁新聞は艦娘寮に貼られているので、おっちゃんやぼんに見つかる可能性は先ず無い。

わざわざこれを口にする者もいない。

秘匿性は充分だった。

この島の変化は、ゆるやかだが確実に訪れ始めていた。

三〇〇名ほどいる艦娘たちの胃袋を満たすには、まだまだ時間がかかるだろう。

せっせと焼いては、並ぶ艦娘たちにほいほいと渡してゆく。

お手伝いの艦娘も増えてゆき、喜作の口元へは団子や豆かんやお好み焼きなどが運ばれていった。

絶妙な連携でおっちゃんは攻略されているのだった。

どうやら、出島の扇島（みしま）に屋台が出来ているみたいだ。

いつの間にやら篝火（かがりび）が焚かれ、那珂ちゃんが歌い始めた。
いつものことである。
何故かその周りで踊る、駆逐艦海防艦潜水艦たち。
ヨイヤサ、エイヤサ、ホイホイサッサホイサッサ。
妖精たちも踊りまくっていた。
彼らまで焼鳥を堪能している。
喜作は夏までに浴衣を用意せにゃあおえんのうと考えたが、大量に反物を購入出来るだろうかとも思った。
そもそも和裁が出来るのか？
供給がまだまだ安定していない状況。
艦娘たちで強ばった顔の者は段々減ってきているけれども、足りないものだらけだ。
どうにかならんかのう。
いや。
どうにかせんとおえんのう。
そう決意した喜作は、うんと背伸びする。
やめじゃやめじゃやめじゃ。
めんでえことは後回しじゃ。

彼に気づいてわらわらと寄ってきた、駆逐艦たちへ手を振る。
すぐさま抱きつかれてしまい、彼は身動きが取れなくなった。
どっかの遊び場にでも、連れていけたらええんじゃけどなあ。
なにか催しを考えようと思うおっさんは、やがて艦娘たちから揉みくちゃにされる。
なにか旨そうな菓子でも作ってもらおうかのうと、可愛い娘たちにしがみつかれつつ
冷静に考える中年男であった。

紅茶

紅茶の歴史は珈琲同様、血まみれである。
その抗争は果てなきものになるかとさえ思われたが、皮肉なことに世界規模の戦争によってそれは中断された。
そして二度に渡る戦争が終結し、紅茶や珈琲の生産が活気づき、輸出入に活況が見られ出した頃、深海棲艦たちの侵攻が開始された。
紅茶や珈琲の輸入が出来ない中で、食にこだわりまくる日本人は国産紅茶と代用珈琲で趣味嗜好を満たさんとする。
比較的早めに解放された東南アジア諸国からの輸入品は日本人たちを歓喜せしめ、セイロンが奪還された際は紅茶好きの人間たちに不思議な踊りをさせた程だ。
人と魔の戦争は確かに終わった。
これからは、飽くなき終わりなき経済戦争が始まる。
世界各国は準備を始め、それを指揮する者たちの傍らには紅茶や珈琲。

特に珈琲はその強烈な香りと常習性で人々を魅了し続けることだろう。

岡山県南部海域に広がるは、笠岡諸島。
その中にある六門島（ろくもんとう）。
島の東に設けられた人工島の扇島（みしま）にて、試飲会が行われている。
こじゃれた洋館の広い室内。
キューバンマホガニーの机の上には、精緻な刺繍を施した真っ白な覆い布がかぶせられていた。
その上には英国製高級茶器群。
イングランドから運ばれた品。
張り詰めた雰囲気の多国籍の人間たちが、高級感ある室内にひしめいている。
真剣な面持ちで、複数の英国製洋式急須（ティーポット）を見つめる美少女。
洋式急須にはそれぞれ布の覆いがかぶせられており、それは駆逐艦たちの力作群。
くりっとした瞳に人懐こい感じの表情の娘が、にっこりと微笑む。
周囲の人間たちはどぎまぎした。
彼女は巫女衣装を改造したような服装をしていて、髪の左右はフィッシュボーンを変形させたようなというかお団子というかハイビスカスみたいというかそんな感じのシ

ニョンめいたまとめ方をしている。
人ならざる娘の美しさに、人間たちは内心ため息をついた。
人に酷似したビスクドールが魂を得たならば、このような姿になるのだろうか？
砂時計の砂が落ちきったのを確認し、彼女は一つの洋式急須にかぶせられていた覆いを取り去った。
ツクリモノの娘は白地に青い龍の絵柄の洋式急須から、同じ柄の紅茶茶碗（ティーカップ）へと紅い液体を慎重に注いでゆく。
沸き上がる湯気と香気。
ふくいくたる薫りが周囲に広がった。
そして、一口飲んでほっとした表情を見せる。
「九州産の紅茶もなかなかネー。」
金剛型高速戦艦一番艦の金剛が破顔すると、彼女の姉妹を含め、人間どももその笑顔に見とれた。
彼女は次々に洋式急須から芳香溢れる液体を紅茶茶碗に注ぎ、水色（すいしょく）や香りや風味などを鑑定してゆく。
その簡潔にして鋭い言葉に一喜一憂する参加者たち。
艦娘の中で、紅茶の鑑定を厳しく行い得るのは二名。

一名は、『紅茶戦艦』または『最終兵器金剛』の異名を持つ金剛。
もう一名は、『陛下』又は『マム』の異名を持つウォースパイト。
どちらも戦時は阿修羅の如く戦場で暴れ回ったのだが、その詳しい実態を知るのは艦娘以外にいない。
両名は現在淑女にしか見えないが、どちらも芯から武闘派だ。
尚且つ人間たちに対して、まだ心を開いているとは言い難い。
気さくな喜作や可愛い新一によって艦娘たちの雪解けが始まっているとは言え、馴れ合うつもりなど無いことを表明していた。
とろけきった大和などの武勲艦やおっさんによじ登る駆逐艦たちなどに驚愕はしたものの、彼女たちの警戒心はまだ解かれていない。

人間どもがこれまでの歴史の中でなにを考えなにをしてきたかを、よくよく知っているから。
人間どもが艦娘へなにをしてきたかなにをしようとしていたかを、よくよく知っているから。

凛とした顔つきの彼女を見て、比叡、榛名、霧島といった妹たちがやさしく微笑む。

姉のためならなんでもするだろう妹たちがやさしく微笑む。
今回は国産紅茶の試飲会になったので、日本有数の紅茶好きである金剛が選ばれた。
ちなみに、この試飲会は極秘である。
試飲会は無事に終わり、国産紅茶の国際進出に於ける躍進はどうやら上手くいきそうだと商人たちは確信する。
建て直しに四苦八苦する国家が多い状況では、日本の立ち位置はとてもいい。
大儲け出来る下地は既にあるし、政府に食い込む余地は大いにあるのだから。
商社の面々は皮算用して、思わずにんまりとする。
侮蔑するような艦娘たちの表情に気づかないまま。

かつてギルバート・キース・チェスタートンは『狂人とは、理性を失った人のことではない。狂人とは、理性以外のすべてを失った人のことである。』と言ったが、では、理性と良心や倫理を失った人のことはなんと呼べばいいのだろうか？
人間は艦娘が信頼するに値する生き物なのだろうか？

夕食終わって歓談の時。
英国調の個室では密談が行われている。

日英艦娘の密やかなお茶会が開催されていた。
緑色のお茶を飲んで、桜餅を頬張る金剛とウォースパイト。
「岡山県産の煎茶もおいしいデース。」
「今度はこのお茶に合いそうなスコーンを焼いてみましょう。サクシュウ（作者註：作州。津山市のこと）のお茶にも興味があります。」
「このお茶は、群馬の焼きまんじゅうにも合いそうデスネー。」
「グンマ、ですか。」
「イエース、群馬はおいしいものがいっぱいネー。勿論、同じ関東圏の埼玉や茨城（いばらき）や栃木や千葉にもおいしいものはいっぱいあるヨー。」
「それは実に興味深いです。」
「日本各地のおいしいものを制覇して、みんなを笑顔にしてみせるネー！」
ふふふ、と笑うは歴然の戦艦たち。
いつでも修羅になり得る戦鬼たち。
二名の纏う影が千変万化してゆく。
あちらが不遜なる無法者になるのならば、何時でも地獄を見せてあげましょう。
人が驕りたかぶるのであれば、何時でも地獄逝きの片道切符を手配しましょう。
フクロウの赤ちゃんがひょこひょこと彼女たちに近づき、やさしく撫でられホウと鳴

いた。

赤ちゃんの頭の上には桜の花びら。

あの百花繚乱たるお花見はとてもよかった。

またあのような楽しみがあってもいいわね。

生粋の戦乙女たちは、今の暮らしを取り敢えず肯定しようと密約を交わした。

後に言う、『桜餅の密約』である。

柏餅

岡山県笠岡市の南部に位置する笠岡諸島。
そこに艦娘たちがわんさか暮らす島あり。
その名を六門島（ろくもんとう）という。
律令制の昔には貴人を流す島のひとつとされ、隠岐島に流される程では無い貴族が時折流された。
島には流人（るにん）と最低限の世話人と見張りの兵士しか住まず、誠に殺風景だったそうな。
律令制を更に遡（さかのぼ）ると豪族が此処に拠点を置き、暮らしていたという。
雑穀ならばそれなりに自生するし、魚は豊富に釣れる。
昨今は蜜柑が多数生って、酒を醸し、芋も作っている。
数名でのんびり暮らすならば、ぼちぼちの生活が可能。
ここは本来、そんな島だ。

寝物語に、喜作は島の昔話を大淀間宮吹雪北上にする。
室内には、濃密な空気が流れていた。
以前喜作と一緒に寝ていた新一は大和を筆頭とする艦娘たちが完全に取り込んでいて、今夜も賑々しいことだろう。
島の人口は現在、戦国時代だった頃のソレに近づいている。
戦闘力的には、今の方が圧倒的に上だ。
昔の話をした結果、古墳を見に行こうということになった。
以前見た埴丸様とはまた異なるらしい。

日曜日ということで新一も古墳見学会に参加する流れとなり、興味を持った艦娘たちの遠足も兼ねることとなる。
参加者の大半が駆逐艦で、今まで喜作や新一と行動を共にしなかった者も含まれていた。
空は晴れ。
行楽日和。
出発進行。

そんなに時間をかけることなく到着。
島はそんなにもばかでかくないのだ。
古墳もさほど大きくなく珍しくもない。
だが、艦娘たちにとっては初見的存在。
初めて見る古墳に興奮する子さえいた。
中は荒らされておらず、当時のままだ。
形状は円墳（えんぷん）と呼ばれる丸い姿をしており、発掘隊が調査をすれば詳しいことが分かるだろう。
じゃが断る、と喜作が以前に調査を断っていた。
罰当たりなことをしようたらおえんのじゃと、彼は言ったのだ。
葬られた存在が祟り神にならないとの保証は存在しない。
寝た子を起こすような真似は許されんと、彼は申し出をことごとく突っぱねた。
貴人か豪族が葬られたのだろうと推察はされているけれども、おっさんの目の黒い内は調査出来ないし、島の継承者たる新一もおそらく許可を出さないだろう。
宮内庁がなにか言わない限りは。

この島には幾つもの不思議が眠っている。

艦娘たちはそう感じていた。
神秘の島だ。
喜作や新一を警戒していた艦娘たちも、そろそろ慣れ始めている。
そんな艦娘たちをやさしく見つめながら、管理者側の大淀は眼鏡をぴかりぴかりと光らせるのだった。

「『皐月の節会（せちえ）』をこれより開始する。総員、掛かれっ！」
総旗艦たる長門の号令が発せられ、艦娘たちが応とこたえて端午の節句の菓子を次々に作ってゆく。
武家屋敷っぽくなってきた建物の近くには紙製の鯉のぼりが風をはらんで翻り、青空にはためいていた。
六門島では女児が島にいる時だけ行われてきた古い行事で、今回は文献を元に再現されることになった。
急に暑くなるこの時期に、菖蒲湯に浸かったり悪鬼羅刹を祓ったりして女児の健やかな成長を願う儀式。
平安時代から行われていたという。
海外艦たちにとって、今回は追儺（ついな）に続く日本的なお祭りである。

彼女たちは明らかに浮き足立っていた。
予算の関係で雛祭りは見送られたが、その分端午の節句にかける勢いは島の元々の住人たる気さくな喜作や可愛らしい新一でさえも驚く程である。
何処から仕入れたのか、錆だらけ穴だらけ傷だらけでボロボロの甲冑（かっちゅう）を何領も運んできて明石を筆頭とする魔改造軍団がトンテンカントンテンカンと修理とはまるで異なる方向性のナニかを施し、立派な鎧武者を生み出した。
おっさんが鎧を試着すると、きゃあきゃあと歓声が起こる。
明石は彼をぺたぺた触りながら、何故大淀たちが険しい目付きで自分たちを見つめるのかと困惑した。
嗚呼、そうか。
彼女たちも着たいのか。
明石は艦娘たちも着られるような、紙製鎧の製作に取り掛かるのだった。
餅菓子が蒸され始める。
期待の気持ちが膨らむ。
嗚呼、平和とはまことに素晴らしいものぞ。
清霜などの駆逐艦たちがおっさんの鎧武者姿を見て、これを着たい着たいと言った。
それは、新たに作られし紙製鎧をまとった姫武将たちが何名も生まれる結果となる。

着用希望者が殺到したために駆逐艦限定とされ、残念に思う艦娘も複数いたようだ。
お祭り後に鎧を着たいとする艦娘も複数いるらしい。
喜作からの進言もあり、駆逐艦全員の紙鎧が作られることになった。
気分は戦国時代である。
その紙鎧は濾過された柿渋塗料を用いた本格派の作りで、それを着た武闘派の夕立や時雨や白露、朝潮満潮霰などの駆逐艦たちに追いかけられる鬼仕様の喜作が見られた。
一応、古式の様式に基づいてはいる。
彼の顔立ちは鬼向きだ。
本人が気にしていないので、思いきり殺れる。
それは艦娘たちの闘争本能を満たすために重要な資質だ。
得物は斧や鍬や鎌など。
丸めた新聞紙ではない。
気分は村上水軍である。
どちらかというと、山賊だか落武者狩りの農民に見えるが。
海外艦たちも雄叫びを上げながら、喜作を追いかけていた。
彼女たちは、先日の追儺で着ていた装束を身につけている。
こちらは丸めた新聞紙を振り回していた。

追儺で使った弓矢を持ち出す者さえいる。
ぶんぶんと鋭い風切り音が聞こえてきた。
おっさんは、ややひきつったかに見える表情で走っている。
やり過ぎるなよ、と長門や武蔵たちに言われて満面の笑みを浮かべる戦鬼たち。
これではどちらが鬼役かわかったものではない。
彼女たちもだいぶんこの島に馴染んできた模様。
ちなみに鬼仕様の新一は既に、でれでれの大和や陸奥や愛宕などに捕獲されていた。
武勲艦たちは、なにやら大興奮している感じだ。
追儺となにやらごちゃ混ぜになっているようだったが、そんなの関係ねえとばかりに艦娘たちはこの行事を満喫しているようである。
結果的には間違っているとも言い難い。
お堅いことを言う者はこの島にいない。
面白かったら、それでよかろうなのだ。
粽は日本仕様だけでなく中華風肉ちまきも作られ、柏餅は濾し餡漬し餡味噌餡草餅仕様なども多数作られた。
点心を蒸す者や餃子を焼く者、焼きそばやお好み焼きを作る者などもいて、既に周囲は混沌化し始めている。

那珂ちゃんはいつの間にか組まれた櫓（やぐら）の上で備中松山踊りの曲を歌い出し、それに合わせて踊る妖精や艦娘たちで賑やかになり始めていた。
骨頭の妖精が体から茨のようなモノを出して、周囲からオオ、と喜ばれている。
柏餅の葉を食べる食べない論争が起こる場所もあり、たまたま島を訪れていた菓子職人が巻き込まれていた。

鬼仕様の喜作が荒縄でぐるぐる巻きにされ、海賊仕様の艦娘たちがえいえいおー！と勝鬨（かちどき）をあげる。
もはや、なんの祭りかわからなくなってきた。
それでも、艦娘たちには喜ばしい行事の模様。
楽しければ、それでよかろうなのだ。
企画者側である大淀がため息をつき、長門や武蔵たちがまあまあと宥（なだ）める。
料理上手の間宮や鳳翔たちが、肉じゃがや煮物煮魚焼き魚などを運んできた。
歓声が上がる。
勝鬨が上がる。
人間が数名しかいない島で、沢山の人ならざるモノたちはおいしいものを腹一杯食べた。

さあ、菖蒲湯が待っている。
明るい声が島を満たしゆく。
とっぴんぱらりのぷう。

蘇芳

ささいな切っ掛けが始まりだった。
明石がたまたま訪れた、岡山県は笠岡諸島の真鍋島。
若き母親と赤ん坊を助けたことに、それは由来する。
乳幼児の死亡率は高い。
妊産婦の死亡率も高い。
感染症は完全に防げていないし、ちょっとしたことで幼子たちは容易に黄泉の世界へ入る。
母親たちも、子を産んで程なく死ぬことが多かった。
それを、艦娘と呼ばれる存在の一名が一命を救ったのだ。
いるのにいないことになっている存在。生きた幽霊。
地域によってはそんな扱いをされるツクリモノたち。
それが艦娘。

戦争の英雄。
忘れ去られゆくべきモノたち。
その筈であった。
それが呆気なくひっくり返る。
他ならぬ、母親たちによって。
女性が一旦腹をくくると強い。
ましてや、母はとても強靭だ。
思いきったことをするのはいつも女性。
女性が時代の改革者になってゆくのだ。
明石を求める声は多く、笠岡市は見て見ぬふりをすることで彼女の行為を黙認した。
医師免許を有する、腕利きの医療従事者。
提督たちや鎮守府関係者を治療してきた。
ならば、その腕を求めるのも道理だろう。
子を持つ母たちは、葉書や手紙や電報や電話など駆使して子供たちを診てもらおうと心底より希求する。
子供を大切にするのは、本来国家の役目。
将来の、国力の要になる存在なのだから。

明石や彼女を手伝う艦娘たちを公認は出来ないが、せめて負担は減らそう。
そう、心から願った者たちがいた。
まともな感性を持つ公務員がいた。
熱意のある医療従事者も存在する。
やがてその思いは幼児や母親の死亡率を格段に下げる要因となってゆくが、それはまた別の話。

真鍋島や獄門島の近くにある六門島（ろくもんとう）。
艦娘の半数以上を占める駆逐艦たちが、建設中の艦娘屋敷裏手にある洗い場近くでせっせと布切れを染めている。
それは蘇芳（すおう）と呼ばれる、黒みがかった赤色をしていた。
明石が診察した子供たちへ厄除けに与える品だ。
戦争中にこれを頭に巻いた決死の『蘇芳艦隊』が作戦後全員無事に帰投したことから、縁起物として今も身に付けている艦娘は少なくない。
赤は魔除け厄除けの力を持つ色として、古来よりしばしば用いられている。
迷信として馬鹿にする外部者がいないでもないが、それは時として歴史的真実を当てていることもある。

安易に否定するのもよろしくない。
それは視野を狭める行為だからだ。
前述の母子を助けた時のこと。
明石が腕に結んでいた蘇芳色の布。
それを赤ちゃんが強く握り締め手放さなかったので、彼女は何気なくそれをその子にあげた。
それは善意からの行為で、特別な意味を有するものではなかった。
その赤ちゃんが診察後怪我なく病気なくすくすく育っていることを知った母親たちは、その布切れをたいそう欲しがった。
いわゆる縁起担ぎの一環だったろう。
成人前に死ぬ子が普通に多い社会だ。
母親のみならず、父親もそれを望む。
妻の無事と子の成長を願うのは、夫として父として当たり前のことだ。
結果。
六門島の東側にある、人工島の扇島（みしま）には現在多くの子連れが訪れるようになった。
政府や県市や警察官などの制止もなんのその、子の安全を願う人々が助け求めて押し

寄せる。
最初に折れたのは笠岡市だった。
近隣の地方自治体から懇願されたのも大きい。
次に折れたのは、岡山県である。
周囲の各県からの問い合わせが殺到した故に。
政府はなかなかどうして折れぬ。
地方はどうでもいいと考える役人がいる故に。

原材料と手間賃を足したくらいの値段で、この蘇芳色の布切れは売れとる。
生産が追っつかん程じゃ。
朝もはようから染色しているせいか、ワシの手は既に赤く染まってきとる。
人様の血みたいなんじゃが、人の血じゃともっとどす黒い色になるらしい。
儲かるのはええことじゃが、大淀さんの試算によるとそげえに資産が増える訳でもねえそうな。
薄利多売か。
難しいのう。
物干し竿には赤い布切れがたなびいとる。

じゃれつく駆逐艦の子たちと共に作業しながら、母子が安心して暮らせる世の中を願う。
ちらっちらっと、巡洋艦系の子や空母系の子や戦艦系の子などがこっちを見ちょる。
なんか変かのう？
ちゃんとゆうてくれなんだら、なんもわかりゃあせんがのう。
言わずともわかるなんて、ありゃあ大嘘じゃ。
そげなん、わかる訳ねえが。
背伸びをして休憩に入った。
扇島の方を見ると、ようけ船がとまっとる。
出来上がった布を運ぶ艦娘。
歓声が上がった。
今日も明石さんは、診療所でてんてこ舞いじゃろうな。
夕張さんとかが手伝っとるらしい。
後で、蜜柑でも持ってっちゃろう。
でも、なんでワシが明石さんと話をしとったらいつの間にか間宮さんや大淀さんや吹雪ちゃんや北上さんが傍におるんじゃろうなあ。
明石さんも不思議がっとったし。

まあ、ええか。
新一も今度診てもらおうかのう。
しかし、なんで大和さんたちは輿（こし）に新一を乗せとるんじゃ？
もしかして、まじないなんかな？
明石さんがなんか知っとるかもしれんけえ、今度聞いてみるか。

温室

艦娘はある意味温室育ちのお嬢様たちだ。
彼女たちは戦場と鎮守府警備府泊地以外の殆どを知らず、人間の男にしても提督副提督提督補参謀憲兵整備士事務員調理師以外の殆どを知らない。
『箱庭姫』と彼女たちを呼ぶ者もいる。
箱庭から外へ出たら、どうなるだろう？
その答を知る者はいない。
岡山県笠岡市南部に広がる、笠岡諸島。
六門島（ろくもんとう）という名前の孤島に彼女たちは住んでいる。
温室に咲く花々のように。

ある日、明石と夕張が島に温室を作ろうと言い出す。
南方の果物を食べたい駆逐艦たちは即座に賛成した。

美しい花々をいっぱい見たい巡洋艦たちも賛成する。
他の艦種の艦娘たちも反対する理由が特になかった。
とんてんかんとんてんかんと工事する内容が増える。
監視している面々はまたもや報告書が分厚くなると嘆いたけれども、彼女たちの笑顔に勝てる者は誰もいなかった。

東京都四谷で創業されたばかりの東京ライフル研究所から取り寄せた純正望遠照準器付き空気銃は、奮発して買っただけあってほんまにええ買いもんじゃった。
二二口径の五．五ミリ。
今まで持っとった兵林館の空気銃が四．五ミリじゃったから、パワアアップちゅうやつじゃな。
こないだ人工島の扇島（みしま）におるオランダ人がドイツ製空気銃を持っとったけえ試しに撃たせてもろうたが、あれもええ銃じゃったなあ。
なにより、空気銃は金があんまりかからんけえ楽じゃわ。
鳥とか兎とかをあれでぱんぱん撃って、解体して熟成させていただくんじゃ。
猪や鹿を撃つには散弾銃がいる。

笠岡市や井原市辺りで仕留めたらこっちへ回してもらえるように知人への連絡はしといたけえ、その結果として氷室には冷凍された獣肉が幾つもぶら下がっとる。
間宮羊羹との物々交換じゃったが、あれはええ取り引きじゃった。
大淀さんに兵林館の空気銃を撃たしてみたら、うもうに（作者註：上手に）的に当てとる。
流石は艦娘じゃなあ。
他の子たちも撃ってみたいと言うんで撃たせてみたら、当たる当たる大当たりじゃ。
ドイツ製の空気銃を今度何挺か送ってもらえるよう、オランダ人たちに頼んでみる。
あちらから送ってもらったゆう、大変珍しいチューリップの球根を見せてもろうた。
チューリップって儲かるんかのう？
どうやら薔薇園も作りたいらしい。
夢はでっかく果てしなくがええの。
吹雪ちゃん辺りは南方の果物が食べたいらしく、バナナだマンゴーだなどと言うとる。
バナナゆうたら、高級品じゃけえな。
台湾とかヒリピンのが有名じゃなあ。
小笠原の島でも作っとるらしいがな。

集まってきた子たちが食べたそうにしとったけど、どうにもならんのう。
間宮さんと鳳翔さんに相談してみたら、バナナカステラを作ってくれた。
バナナの形をしとる、白餡入りのカステラ菓子じゃ。ハイカラじゃのう。
岡山県でも作っとる店があるらしい。
そう言えば、昔食べたことがあった。
骨頭の妖精が杖を振って、ガラス張りの温室作りを指揮しとる。
それを見ながら、みんなで出来立てのバナナカステラを頬張る。
でえれえうめえがな。
みんながぼっけえにこにこ出来るようにせにゃあ、おえんのう。
今日は鹿肉と猪肉を使ったハンバーグにしますからね、と間宮さんが言った。
付け合わせはドイツ風ポテトサラダとイタリア風パスタにしますと鳳翔さん。
それはアーリオ・オリオ・ペペロンチーノね、とイタリア艦娘の子がゆうた。
なんじゃ、そのハイカラさんに聞こえる食べもんは。
そのなんとかなんとかゆうパスタは、唐辛子とニンニクだけで作れるらしい。
新一の周辺でも大和さんたちが盛り上がっとる。
ソヴィエトだかロシアの艦娘たちがボルシチがどうのとかピロシキがどうのとかゆうとって、ブリヌイゆう料理を今度作ってみると間宮さんがゆうとる。

なんかようわからんが、パンケーキゆう食べもんの一種らしい。
ちっこいそうじゃ。
ハイカラじゃのう。
明日は、家鴨（あひる）を買い付けに行かにゃあいけん。
みんなの食生活を充実させるんが、ワシの使命じゃけえ。
「おーおー、提督、燃えてるねえ。」
いつの間にか、北上さんがワシの背後におった。
「今夜も一緒に燃えてみる？」
にやにやしながら、彼女がゆうた。
困っていると、にやにや顔が増えてきょうる。
そしてワシはおいしくいただいた。
ぼっけえうまかった。

狩猟

爺さんや親爺がなんでもかんでも放り込んでいた蔵を整理しようか思うて、大淀さんに手伝いをしてくれる子はおるかのうと相談してみた。

二、三人手伝うてくれたらありがてえなあと思うとったら、ぼっけえ数の艦娘が手伝いに来てくれた。

なんでこげにおるんじゃ？

蔵の中に入りきらんがな！

爺さんが酔狂で集めとった刀剣類や親爺が血道を上げとった銃砲類は危ないんで駆逐艦の子たちはおえん（作者註：ダメの意）とゆうたら、皆強力な火砲や魚雷や爆雷を扱っていたので大丈夫ですと言われた。

そげなもんかのう。

こげに可愛い子たちが、そげなもんつこうて戦争しとったんか。

どえれえ話じゃ。

数打ちの刀がごろごろ出てきて、眼帯をした子たちや武術家みたいな子たちが感心しとったんでみなやった。
ワシが持っとっても、どげにもならんからのう。
刀身はなまくらで錆も浮いとるし、鞘の漆は剥げてきょうるし、柄糸もぼろぼろじゃ。
それでもええ言われた。
眼帯をしとる内の大柄な子が抱きついてきて、大淀さんや北上さんが引き剥がしとった。
鉄砲もごろごろ出てきて、みんなびっくりしとった。
ワシもびっくりじゃ。
見たことのない空気銃や散弾銃がある。
なんとまあ三八式歩兵銃まであるがな。
爺さんが戦争に行っとった時のやつか。
弾が湿気っとるんじゃねえか思うたら、妖精に任せたらなんとかなるという。
ホンマか？
散弾銃はブローニングのオート5とかいう銃身後退式で、ハイカラ好きな親爺の好みに合ったらしい。
空気銃は三挺あったが、皆艦娘にやった。

親爺もあの世で喜ぶことじゃろう。
蔵からいろんなもんが出てきたけえ、いらんもんは皆欲しい艦娘へやった。
皆大喜びじゃ。
こげなんで喜ぶとはのう。
提督とかの男衆はなにをしとったんじゃ。
しかし、なんでマタギがつこうとった山刀まであるんじゃろう？
秋田の阿仁（あに）で作られたもんらしい。
間宮さんがマタギの携行食だったゆうカネモチを作ってくれて、皆でおいしゅう食べた。
地域によって、味噌を入れたり入れなんだりするらしい。

近くの島々に猪や鹿やカラスとかが割と出没して、たいそう困っとるそうじゃ。
真鍋島の駐在さんに害獣駆除してええかと聞きに行ったら、どんどんやればよろしいと言われた。
そげなもんかのう。
明石さんや夕張さんが調整してくれた散弾銃や空気銃を持って、困っとる島巡りをしようかと大淀さんにゆうてみた。

そしたら、希望する子が意外と多かった。
鉄砲を撃ちたい子は意外といるようじゃ。
・２２ＬＲゆう小粒の拳銃弾を撃つウィンチェスターのレバー・アクション・ライフルも二挺あったんで、気分は西部劇じゃな。
ちっこいネズミやウサギなどは空気銃、野犬やタヌキやキツネなどはレバー・アクション・ライフル、シカやイノシシがおったらワシが散弾銃か歩兵銃で仕留める話になった。
さて、出航するか。
「第一艦隊、抜錨します！」
ぼんぽん船に乗った大淀さんが、バールを高々と掲げながら宣言した。
港にはすべての艦娘がおって、皆がおお、とめちゃめちゃ盛り上がっとる。
何故か大漁旗を持って走っとる子がおるのう。
北上さんが魚雷型水筒からお茶を注いで、ワシにくれた。
一艦隊は六名なんだよ、と彼女は言う。
吹雪ちゃんや他の子たちも満面の笑顔をしとる。
狩りの時間じゃ。
アイヌみたいな恰好をした子や、巫女さんみたいな恰好をした子がなにかを祈願しと

る。

海外の子たちはジビエよジビエよと興奮しとる。

さて、行くかのう。

そして、ケモノ狩りの旅に出た。

生鰹

深海棲艦がいなくなった影響じゃからか、鰹（カツオ）が大漁らしい。
ワシらが住む六門島（ろくもんとう）にも、大量の鰹が水揚げされた。
岡山県の笠岡諸島にあるこの島は現在喜びに沸いとる。
他の島々も同様じゃろう。
大漁旗を持って、駆逐艦じゃった子たちや軽巡洋艦じゃった子たちが島の港を元気に走り回っとる。
よっぽど嬉しいんじゃな。
「もーっと、私と漁に出てもいいのよ！」
「大漁なのです！」
「いい旗ね。嫌いじゃないわ。」
「ぴゃん！」
「全力でいく所存です！」

「どーん！」
「那珂ちゃん、歌います！」
「一航戦加賀、歌います。」
「ワタシモ、ウタウ！」
お祭りが始まってしもうた。
まあその、元気なことはええことじゃ。
全国的に豊漁じゃとか。
間宮さんや鳳翔さんや、厨房担当の子たちが燃えとる。
どうやら旨いもんが食えそうじゃ。
鰹をどうやって喰いたいんかと聞かれたんで、豆腐や挽き肉と混ぜて肉団子にしてもええんじゃないかと伝えておいた。
島の東側にある人工島の扇島（みしま）におるオランダ人によると、トルコには鰹のオーブン焼きゆう食いもんがあるそうじゃ。
ハイカラじゃのう。

初夏の夕暮れが迫ってきた。
日が段々長くなってきたのう。

食卓は晩餐会みたいになっとる。

・鰹の叩き

・鰹丼

・鰹と豆腐と挽き肉の肉団子

・鰹のなめろう

・鰹のオーブン焼き

・鰹の竜田揚げ

・鰹のコロッケ

鰹尽くしじゃが。

生鰹万歳！　というとこじゃな。

醤油は岡山県新見（にいみ）市産のものに高知県産の純米酒と味醂（みりん）を加えてひと煮立ちさせ、火を弱めてから土佐の鰹節を加えて冷ました後に濾したもんで、土佐醤油というらしい。

手作りの逸品じゃ。

濾した後の鰹節にはらりと葱をかけて喰うてみると、これがまたたまらぬ。

岡山県産大豆で作られた冷奴で喰ろうてみたが、これもまたたまらぬのう。

高知県安芸郡の酒造所で醸された辛口の純米酒を、ちびりちびりとやるのもええもん

じゃ。
戦艦じゃったゆう艦娘たちはいける口の子がけっこうおって、重巡洋艦や正規空母や軽空母じゃった子たちも加えて酒盛りした。
鳥取島根岡山広島香川高知愛媛徳島山口の名酒がずらりと並んで、大宴会が始まった。
甘口辛口どっちもアリじゃ。
女酒男酒、どんとこいじゃ。
ぐはは、旨い旨い！
おお、大淀さんも間宮さんもこっち来て呑まれえ。
わはは、愉快愉快！
なに、野球拳じゃと！
止めるな、新一！　北上ちゃん！　吹雪ちゃん！
駆逐艦の娘たち、ワシを止めたらおえんのじゃ！
ワシはその昔、鬼と呼ばれた男よ！
瀬戸の鬼武蔵とは、ワシのことよ！
どげな相手にも負けはせんのじゃ！
誰でも来るがええわ！

なにい、武蔵じゃと！
新免武蔵か！
二刀流か？
岡山県出身か？
なんじゃ、違うんか。
ええい、仕切り直しじゃ！
ぬははうははわはは！
愉快痛快、退屈の虫がうずくわい！
ワシは誰の挑戦でも受けるぞ！
ほれ！
野球～
す～るなら
こういう具合に
しやしゃんせ
アウト！
セーフ！
よよいのよい！

ふん、それ見たことか！
わはは、ほれ、何人でもかかってけえ！
喜作、参る！
なに？
本来の野球拳は愛媛県松山市の郷土芸能で、脱衣など無いじゃと？
横濱の遊廓で幕末に行われていたもんが、誤って伝わったじゃと？
せげなん知らんがな！
で、ワシの一人勝ちでええんか？
この鬼武蔵に勝てるもんなぞ、誰もおらんゆうことじゃな。
おお、ワシに勝つ気か、お嬢ちゃんたち。
ぐはは。
うぉーすぱいと？
びすまるく？
がんぐーと？
ろーま？
あいおわ？

りしゅりゅー？
どこの国の子でも存分にかかってけえ！
この喜作、日本男児として逃げはせん！
どうやら、遊んでほしいようじゃのう。
なんぼうでもかかってけえ！
ほれ！
野球～
す～るなら
こういう具合にしやしゃんせ～
アウト！
セーフ！
よよいのよい！

梅雨

蒸した梅雨模様の雨空。
日本政府の要人たちが集まっている筈の国会議事堂。
高級な服を着た、愚物な俗物たちが醜悪なにおいを撒き散らしていた。
彼らは揃って蒸し暑くなるような気配を漂わせ、愚にもつかぬおなごの話題で更に品性を下げてゆく。
天下を語らず、太平を語らず。
国民の生活のことも考えない。
語るは欲望まみれのことのみ。
政治ごっこをする権威主義者。
衆愚政治が場を腐らせている。
それを天井裏から見つめる、軍学者めいた姿の男がいた。
五世紀と数十年生きてきた意味は、どこにあったのだろうかと彼はため息をつく。

その日、滋賀県南部に位置する甲賀市及び三重県北西部に位置する伊賀市の女性調査員たちが二名ずつ議事堂へ召喚された。
彼女たちの忍務は、岡山県笠岡諸島に位置する六門島（ろくもんとう）での監視その他が主なもの。
その孤島東部に位置する、人工島の扇島（みしま）に居住するオランダ人たちの監視も忍務に含まれている。
政府はようやっと、外国に対する防諜に力を入れようと重い腰を上げつつあった。
外交官がへっぽこ揃いで頭領が鳥頭。
日本の外交力は三流かそれ以下と評価されている。
首相の首は頻繁に取り替えられ、それはまるで出来の悪い玩具だ。
官僚任せの政治は腐敗し、深海棲艦に勝利した意味は日々加速度的に失われつつあった。
あまりに遅まきながら、彼らはなんとかしようと手を打ち始める。
既に情報は相当流れているが、それはもう過ぎたこととして今後の諜報戦をなんとかしようという泥縄式。
まさに日本政府らしい仕事ぶりだ。
なにもわかっていない連中が頭脳部である限り、どげんもこげんもならぬだろう。

それは兎も角。
元艦娘たちを戦後に小島へ封じ込めたまではよいのだが、飼い殺しにしている筈の彼女たちに不安を感じる権力者たちが次の手を打ったのだ。
遅きに失した感はあるのだが、やらぬよりはずっとましであろうと彼らは考えた。
彼らにだって、そこそこの思考力はあるのだ。
頭がいいと、自身でうぬぼれているのだから。
近視眼的で視野狭窄で閉鎖的でダメダメだが。
甲賀忍びの名は、陽炎（かげろう）とお胡夷。
代々受け継がれてきた名だが、妖艶にして思慮深い陽炎は速水里沙と名乗り、無邪気にして豊満な肉体美のお胡夷は喜村波留華と名乗ることに相成った。
伊賀忍びの名は、朱絹（あけぎぬ）と蛍火。
彼女たちも代々引き継がれてきた名を変え、冷静沈着な朱絹は綿目美沙と名乗り、可憐な乙女の蛍火は佐波城深幸と名乗ることに相成った。
いずれも手練の業を誇る戦忍びたち。
太平の世に埋もれる筈だった女戦士。
人外の力を持つ娘たちは、元艦娘たちに拮抗し得る能力の持ち主として選ばれた。
それが吉と出るか或いは凶と出るか。

四名の美人くノ一たちは、西へと向かう。
己の美貌にあまり頓着しないおなごたち。
新たな波乱が、六門島へ訪れようとしていた。

蒸しあちいのう。
梅雨時は蒸し蒸ししてかなわん。
最近、島がちいとおおきゅうなっとる気もするんじゃけど、気のせいじゃろうなあ。
あの生け簀はいつの間に出来たんじゃろうか？
まあ、ええか。
ようけ食いもんはいるからのう。
大本営だった組織から、この島へ連絡があったのは数日前。
新たに人工島の扇島へ、『風太郎商店』とゆう店が作られることになったそうじゃ。
利便性を上げるための生活雑貨店ゆうか、駄菓子とかも置いとる多目的店舗ゆうか。
なんでも、滋賀県出身の娘さんたちと三重県出身の娘さんたちとで経営するらしい。
いっぺん会（お）うてみたが、みんな美人さんじゃのう。
でえれえもんじゃ。
おどろいてしもうたが。

なんでか知らんけど大淀さんや間宮さんらが夜寝屋で汗だくになりながら、血相変えてワシに捨てんでくれみたいなことを言い出した。
なにをようるんじゃろう？
説得するのに往生したわ。
お店の娘さんたちが挨拶に来た時は、なんとも大変じゃった。
おっとろしい程警戒した艦娘たちに困惑する店の娘さんたち。
まあまあとなだめながら、なんとかしといた。

女忍びたちは多少自分たちの見目がよかろうことを理解していたけれども、ここまで敵愾心（てきがいしん）を持たれることまでは予想すら出来ていなかった。
島のぬしである冴えない中年男と可愛い小学生の男の子へ少しばかり愛想を振っただけなのだが、それは思いがけぬ程の劇的な化学反応をもたらした。
特に大和が荒れに荒れまくり出した。
普段の理知的姿から考えられない程。
人の形をした暴風雨が吹き荒れゆく。
戦艦級の元艦娘たちが抑えに入る程。
最初に彼女を鎮めようとした駆逐艦や軽巡洋艦たちが、彼女の生み出した衝撃波に

よって呆気なく吹き飛ばされたためだった。
幸い手加減した為、娘たちは軽傷で済んだ。
しかし、暴風雨は鎮まりなどしない。
艦娘寮は大激戦地へと変貌を遂げた。
咄嗟に大和を抑えようとした扶桑山城伊勢日向が一撃大破し、大騒ぎになる。
紅茶戦艦姉妹も続々と中破してゆく。
遅れて戦場へ到着した武蔵も清霜と共に、全力で姉を抑えに入っていた。
正規空母たちも中破艦が目立ちだす。
素肌をかなり露にせし霧島が機転を効かせ、大和が溺愛している少年を呼びに行った。
新一の会心のなでなでとお手々すりすりと無垢な上目遣いにより、最悪の事態は回避される。
白いカッターシャツに黒い半ズボンという姿もよかったのだろう。
毎日の登下校時に見ている筈だが。
怒涛の三連迫撃が効を奏したのだ。
おそるべきは、可愛らしい少年よ。
艦娘たちの愛憎の恐ろしさを、忍びたちは数日で存分に味わい尽くした。

これはとても報告書に書けぬ。
頭を抱えて悩むワルキューレ。
内々に留めようと話し合った。
尚、オランダ人たちは躊躇することなく、これらの詳細を欧州へ送った。
そこに遠慮だとか憐れむだとか推し量るなんてことは、一切見られない。
その報告はとある長寿の忍びによって、途中で巧みに握り潰された。
防諜任務達成である。

手練れの中忍級たる女忍びたちは、素早く貢ぎ物を繰り出した。
滋賀県のお菓子として、くノ一最中やでっち羊羹や弦之介煎餅。
三重県のお菓子として、かたやき、浜焼煎餅、それから朧饅頭。
船便にて島に送られてきた。
ニヤリと笑う、悪人顔の軍学者めいた姿の男が軽やかに食べ物を運ぶ。
微妙な顔の部下たちに、意外にも面倒見のいい超高齢の彼は当惑した。
伝説が幾つも眠るこの島で、なにがあったというのだろうか？
到着後、すぐに贈答される。
それはかなりの量であった。

食べ物の効果は絶大だった。
喜びに沸く島に住む者たち。
何故だか大漁旗を持った娘たちが、そこかしこで走り始める。
女忍びはようやく安堵する。
不戦の約定を結ばねばなるまいて。
そう、しみじみと思う女戦士たち。

雨が降ったり止んだりしようるな。
岡山県は全国一降雨量の少ない県なんじゃがのう。
降雨の合間に咲いた薔薇をみょうたら（作者註：見ていたら）、いつの間にか商店の娘さんが傍におった。
着物姿に割烹着。
地味じゃが、美人さんはどげな姿でもよう映えるのう。
「おお、まるで立川文庫に出てくる忍者みたいに神出鬼没ですのう。」
「え、えっ？　ええと……。」
誉め言葉のつもりでゆうてみたが、何故か顔がひきつっとる。
「どげんしました？」

「い、いえ、私はただの売り子ですから、忍者みたいなことなんてとてもとても出来ませんわ。お、おほほ。」
「それもそうですのう。あはは。」
そこへ、ずんずんとどこからか北上さんがやって来た。
むんずと手を掴まれ、強い力でぐいっと引っ張られる。
「提……喜作さん。ちょっとこっちへ来てくれる？」
「そいじゃあ、お嬢さん、またの。」
にこにこする娘さん。
睨み付ける北上さん。
よろしゅうねえのう。
二人で歩いていると、北上さんが言った。
「提督って、ああいう女が趣味なの？」
なんのことじゃろうか？
「ワシはただ、今しがたあの娘さんと会うただけじゃが。あげに睨むのは、あんましようねえで。」
「わかった。気を付ける。で、それはホントなの？」
「ほんとじゃ。嘘をゆう理由なぞなんもなかろう。」

「提督を信じるよ。」
「当たり前（めえ）じゃが。」
そしてワシは発声器官を塞がれた。
なんとも、強く激しい力じゃった。

翁飴

越後の国に
翁飴と呼ばれる名菓あり
餅のごとき歯応えにして
餅にあらず
これまさに
知る人ぞ知る旨き菓子也

越後商人が六門島（ろくもんとう）へやって来て、翁飴（おきなあめ）ゆう菓子を格安で販売してくれた。
ありがてえことじゃ。
米をつこうてねえのに、もちもちしていてうめえがな。

越後産の米もたんまり持ってきてくれた。
甥っ子の新一を御輿に担いだ大和さんたちが、わっしょいわっしょいしとる。
よほど嬉しいんじゃなあ。

岡山県南部の笠岡諸島にあるこの島の、東側に作られた人工島の扇島（みしま）。
そこに設けられた商館で、ワシは越後の精力的なおっさん系あきんどと話をする。
「気候も雰囲気もここ岡山県と我が新潟県とでは、まるで違いますねえ。」
「西国の瀬戸内海と北陸の日本海じゃ、いろいろと違うじゃろうしのう。」
「新潟は米どころ酒どころとして全国的に知られていますが、菓子の観点でも趣深いものを多数有する県なんですよ。」
「ほほう。」
「日本三名菓のひとつの越乃雪、それから笹だんごにゆべしに翁あめ。天神菓子に柿の種、玉うさぎ、粉菓子、おこしがた。新潟県民は商売下手が多いですし、私もそうではありますがこちらの皆様とご縁を持ちたいものです。」
ようゆうわ。
越後商人と言えば、戦国時代に武田晴信公へ塩を売った話が有名じゃのう。
長尾景虎公の采配じゃったんじゃろうか？

北条氏康公も立腹したことじゃろうなあ。
小田原と言えば提灯に蒲鉾に外郎（ういろう）が有名じゃが、名古屋や山口の外郎もええなあ。
あのもちもちした食感はええもんじゃわ。
今度山口まで行って、外郎を買（こ）うてけえろうか。
名菓の亀の甲せんべいも土産にええなあ。
みんなも喜ぶじゃろうて。
越後の海産物に艦娘のみんなが欣喜雀躍としとったのは、とってもよかった。
瀬戸内の海の幸もぼっけえうめえが、全然違う海の幸もええもんじゃけえな。
なんだか、甲賀の娘さんたちと伊賀の娘さんたちの機嫌が大変悪そうに見える。
別に越後を取り立てて誉めとる訳でもねえんじゃが、危機感があるんじゃろう。
甲賀伊賀のお菓子とかお茶とか焼き物とか酒も大変よいのだと、娘さんたちから強く訴えられた。
難しいのう。
その越後商人からは佐渡島の北雪ゆう酒を貰ったけえ、大淀さんたちや甲賀伊賀の娘さんたちと共にちょっとした内輪の酒宴を行った。
親睦会みてえなもんかの。

一本じゃ足らんじゃろうから、近隣諸国である備前備中作州備後安芸讃岐の日本酒も用意する。
おお、この佐渡の酒はええ味じゃが。
風雪に耐える味わいゆう感じかのう。
「一番！　大淀！　脱ぎます！」
は？
え？
ちょっ！
大淀さん！
脱いだらおえん！
なにしょん、あんたは？
「だいじょーぶですよう。提督はいっつもいっつも、この体を隅から隅までじっくりご覧になっておられるじゃありませんか。」
「な、な、なにをようるんかな、大淀さんは。こげな席で服を脱いだらおえんじゃろうが。」
「あらあら、どうして脱いだらダメなんですか、提督。」
「鳳翔さんまでなんで脱いどん？　そげなんおえんわ！」

「甲賀者代表として、絶対に負けてはいられません！」
「伊賀者としてもこの戦、負ける訳には参りません！」
「あんたらも悪酔いしとるが！　脱いだらおえんわ！」

翌朝、北上さんや吹雪ちゃんを含む子たちから酒くさいと全員怒られた。
その上、酒好きな子たちから呑ませて欲しかったとしんみり言われ、残った分を全部取られてしもうた。
その次の日。
富山県の薬売りと山梨県の行商人が、六門島へやって来た。
もらいもんじゃけどと翁飴を新潟の村上茶と一緒に出したら、なんか知らんけど微妙な顔をされた。
でっち羊羹の方がよかったじゃろうか？

白桃

世界最高峰の白桃の産地、岡山県。
西日本有数の素晴らしき果物王国。
県南の笠岡市が有するは笠岡諸島。
その瀬戸の島々の中に、六門島（ろくもんとう）と呼ばれる島がある。
笠岡の船着き場から真鍋島行きの船に乗って行けば、その真鍋島から直行便が出ている。
朝と夕方の一日二便。
出島の扇島（みしま）が公的な船着き場になっていて、私的な身内の船着き場は島の南側中央部に位置する。
六門島に住まうおのこは、井東家の中年男喜作と彼の親戚で小学生の新一。
おなごは艦娘。
ちなみに人工島の扇島には諜報員系自称オランダ人たちが商館兼住居で生活してお

り、最近は伊賀市甲賀市出身のくノ一たちが駄菓子屋的店舗で起居している。
さて、その六門島へ素晴らしき桃が幾つも幾つも届けられた。
マスカット・オブ・アレキサンドリアや、近年開発されたベリーAなども一緒である。
麗しき形以外を許さぬ市場から弾き出されたモノ。
少しばかり見目よろしからざるモノ。
瑕疵（かし）ありて許されなかったモノ。
そういったものモノが、艦娘たちの元へと運ばれてきた。
形あしくとも味うまかりけりな。
ならば。
愛持ちてそれを喰らうが手向け。

世の中に
敵（かたき）というは
旨きもの
どうぞ敵に
廻り合いたし

ぼっけえ数の桃や蒲萄をいただいたけえ、艦娘のみんなもでえれえ喜んどる。
うめえもんを食べるのはええことじゃ。
桃は足がはええけえ、はよう食べんとおえん。
まあ、おえんく（筆者註：駄目に）なっても干したり煮たりすれば長持ちするじゃろう。
こんふぃちゅーるとかぴゅーれとか、なんかハイカラなメリケン言葉も聞こえてくるがようわからん。
うまけりゃそれでええ思うんじゃがのう。
『瀬戸のべた凪（なぎ）』でちいと暑いんじゃが、まあ、仕方ねえのう。
北海道にでも行けば涼しいんじゃろうが、そうもうもうは行かんのじゃ。
新一は近くにおる艦娘たちに団扇（うちわ）であおがれとる。
これがホンマの左うちわじゃな。
……違うか。

パフェゆうハイカラな食いもんを、産まれて初めて食うた。
でえれえうめえがな。
これで後七五日長生き出来そうじゃ。

白桃、蒲萄、生クリーム、木の実、バニラアイスクリーム。
贅沢にも、バナナやチョコレートといった材料もつこうとる。
バナナは台湾、ソースとして使われたチョコレートは欧州経由のアフリカ産じゃと。
なんでも古きメリケンの甘味でバナナスプリットゆうのがあって、それを参考に作ってみたそうじゃ。
東京の老舗ホテルでそげなんを食べられるそうじゃけえ、そこのも一度食べてえのう。
そう漏らしたら、なんでか知らんけど鳳翔さんと間宮さんに腕をつねられてしもうた。
ふざけた吹雪ちゃんや北上さんがワシの口の中へひょいひょい匙を突っ込むけえ、他の駆逐艦の子たちが真似して大変じゃった。
バナナを見つめた後でワシを見て、にんまりする娘たち。
その夜、複数の娘から密林とか収穫とか熟成とかスプリットとか言われて、いろいろ大変じゃった。

岩屋

岡山県南部に位置する笠岡諸島。

その島々の中に、ワシと甥っ子の新一と艦娘などの住む六門島（ろくもんとう）がある。

天の岩戸がこの島にあったという伝説を爺様から幼少時に聞かされたもんじゃが、アメノウズメとサルタヒコの出会った場所が六門島との話をするもんまでおる。

県内の成羽町（なりわちょう）発祥の伝統神事である、『備中神楽』との関連性を指摘する学者さんもおるそうじゃ。

あっちはスサノオノミコトとヤマタノオロチの話もあるんじゃったな、確か。

ちごうたかのう。

ヤマタノオロチが製鉄法自体を意味し、天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）が尻尾から出てくるのは作刀の暗喩だとの説もある。

それと、あの剣は草薙剣とも言うのう。

まあ、ワシにはどうでもええ話じゃが。

今日はその伝説が伝わる『鬼の岩屋』の探検じゃ。
洞窟探検ゆうか確認作業をせにゃおえんけえ、調べてみんとの。
注連縄（しめなわ）も古くなってきとるから、新しく作らんとおえんのう。
行きたいもんを連れてゆくとゆうたらみんな行くゆうて、なんだか遠足になってしもうた。
あの洞窟は、艦娘全員が入れるかのう？
懐中電灯の数が少ないので、赤穂浪士が用いた龕灯（がんどう）を見よう見まねとゆうかうろ覚えで作る。
以前真鍋島に旅芸人の一座が来て忠臣蔵の劇をした時に龕灯が壊れたんでワシが作ったんじゃが、あん時の品をお手本に作り直しじゃ。
これは携帯用灯明じゃな。
ランプがあればこげえなことなどせんでもええんじゃが、ねえもんはねえ。
ねえなら作りゃあええが。
明石さんや夕張さんを中心にして、工作の得意な子がどんどん作ってゆく。
でえれえ器用じゃなあ。

明石さんを誉めたら、大淀さんと間宮さんから肘鉄を喰らった。
なんでじゃ？

洞窟入口に高張提灯を用意する。
魔除けの籠目紋仕様になっとる。
昔から籠目紋をつこうとるが、土御門（つちみかど）家が関係しとるとかしとらんとかなんかようわからん。
知っとるもんが兵隊に行って死んどったりするから、口伝が残っとらんくて中途半端になったりしょうる。
おえんが、とは思うんじゃけどしょうがねえわなあ。
提灯を見て御用だ、御用だ、とにこにこしながらゆう子たちに気分がやわらぐのう。
それはいろいろ違うんじゃが、まあ、指摘するのも野暮じゃろ。
洞窟入口前では間宮さんや鳳翔さんらがおにぎりをこさえたり、味噌汁や漬け物の用意をしとる。
探検が終わったらご飯じゃな。
探照灯という艤装の装備を持っとる子たちがおって、それらは蓄電池で使える仕様に明石さんが改造したそうな。

器用な人じゃのう。
それらは兵器扱いじゃなく、書類の書き換えで備品扱いにしたらしい。

懐中電灯に散弾銃を持ち、探検隊の準備をして洞窟に入ると中は意外に深い。
足元がゆるやかな階段状になっとって、地下へ地下へと人を飲み込もうとしとるようじゃな。
入っちゃおえん言われてずっと入らんかったけえ、中がどうなっとるんかさっぱりわからん。
ご先祖様の作成した地図には黄泉の国まで続いとるなんて世迷い言まで書かれとるけえ、眉にツバつけとかんといかんがな。
深いのは確かなようじゃ。
新一は大和さんがおんぶしとる。
交代制でおんぶを変えるらしい。
おんぶしましょうかと周りの娘たちに言われたが、そげなことが出来る訳ねえがな。
気を引き締めて、探索開始じゃ。
「全艦、抜錨!」
総旗艦の長門さんがそう言って、ワシら怪しい探検隊は洞窟へ入ってゆく。

「洞窟って、この辺は多いんですか？」
　しばらくして、隣の吹雪ちゃんが質問してきた。
「そうじゃなあ、岡山県じゃと県北の新見（にいみ）や真庭に多いんじゃがな。新見の井倉洞が特に有名じゃ。」
「成程。それで、この洞窟はどこまで続いているんでしょう？」
「黄泉の国に繋がっとるゆう、しょうもねえ与汰話も聞いたことがあるのう。」
　みんなでわいわいがやがやゆうて、中を調べてゆく。
　先頭はワシと吹雪ちゃんと北上さんと戦艦の艦娘たちじゃ。
　慎重に慎重に辺りを調べる。
　狸かなんかおるかもしれんと思うたが、コウモリがおるくらいじゃな。
　やがて、小学校の体育館みたいに広い空間に辿り着いた。
　艦娘全員が入ってもまだ大丈夫で、なにかここで儀式でもやっとったんじゃろか？
　焦げた薪とか古びた机とか錆びた刀とかがあってなにかしょうたらしいのはわかったけど、なにをしょうたかはちっともわからん。
　どうやらここで行き止まりのようじゃ。
　吹雪ちゃんの龕灯から蝋燭を取り出してみたら炎が揺らいだので、どこかから風が来

とるらしい。
火が消えんけえ、窒息することも無さそうじゃ。
結局、そのまま洞窟から出た。
まあ、また今度調べてみるか。

丁度備中松山踊りの時期じゃったんで臨時汽車を出してもらえるように、呉の後輩に圧力をかけてみた。
お盆の時期じゃから機関車と客車の調達に苦戦したようじゃが、お国のために働いた艦娘たちへの慰労と思えば、遺漏なく出来るじゃろう？
祭にゆくのはみんな初めてじゃそうな。
こりゃあ、どうしても連れていかにゃあおえん。
汽車は山陽本線笠岡駅を出発し、倉敷駅で伯備線に変更となって北上し、総社駅を経由して備中高梁（たかはし）駅に到着。
到着後はそのまま駅前通りで繰り広げられる祭を見学し、屋台で買い物などを堪能ゆう寸法じゃ。
祭を見学した後はまた汽車に乗って笠岡駅まで戻り、船に乗って六門島へ戻る。
その内、倉敷の美観地区へ行って、大原美術館へも行かんとおえんのう。

岡山県と兵庫県の県境にある鬼首村（おにこべむら）の亀の湯へ、みんなで出掛けるのもよさそうじゃ。
嬉しそうに話しかける娘たちへやさしく声をかけ、眠りに入る。
この島でもなにか秋祭りでもやろうかのう。
もう少ししたら蜜柑の収穫時期じゃ。
いろいろと忙しくなりそうじゃなあ。

蜜柑

蜜柑。

柑橘類の一種。

中四国地方では愛媛県と広島県が特に品質と生産量で名を馳せ、近隣諸国では香川県徳島県山口県高知県がそれに猛追している。

それらの強豪県に挟まれた岡山県でも幾らかは蜜柑が生産されている。

それは此処、県南の瀬戸内海に広がる笠岡諸島にある島々でも同様だ。

艦娘たちがひっそりと暮らす六門島（ろくもんとう）でも蜜柑の収穫時期を迎え、真冬でも雪が降ることの滅多にない孤島で彼女たちは蜜柑狩りに勤（いそ）しんでいる。

比較的長く常温保存可能な蜜柑は林檎と並んで冬場でも割合手軽に楽しめる貴重な甘味であり、季節の風物詩でもあった。

近畿地方から密偵として潜入しているくノ一たちも、欧州から諜報員としてやって来た南蛮人たちも、等しく自然の恩恵を受けている。

艦娘たちの人間と異なる無垢さに彼らは感化されつつあり、それが、それこそが、大本営や日本政府などが潜在的におそれた事態であることを島に住む者たちはまだ誰も知らない。

瀬戸の艦娘と島民たちは今日も通常運転。

明日も明後日も通常運転。

イタリア製の高性能なオリベッティのタイプライターで、練達の諜報員はその日も本国への暗号文を打つ。

ヤーパン製の干し蜜柑を口中で楽しみ、『ラインの護り』を小声で歌いつつ。

『本日もマリコは学校で元気よく歌いました』、と。

蜜柑狩りをせんとおえんのう、と呟いたのが始まりじゃった。

大淀さんがではやりましょうやりましょうと言い出して、吹雪ちゃんやなんかよう似た妹さんたちも大賛成してくれて、この島の蜜柑だけじゃのうて他所の島へも蜜柑狩りの手伝いをすることになった。

どこも人手不足に悩まされとるのは、変わりゃあせんのう。

「いや、艦娘のみんながようけ働いてくれようるけえ、ほんまに助かったわ。」

近くの島の知り合いがそうゆうて、にこにこしよった。
船は向こうが出してくれるとゆうんで、それらに乗った艦娘たちが周囲の県の蜜柑畑へ向けて出航してゆく。
「第二水雷戦隊、抜錨！」
「第一機動艦隊、抜錨！」
「第六駆逐隊、出撃よ！」
「第七駆逐隊、出るわ！」
「五航戦、出撃します！」
「みんな、おっそーい！」
誉れ高らかに勇ましい声が幾つも放たれ、六名ずつ艦娘の乗った漁船群が海原を走っていきょうる。
蜜柑収穫作戦、決行じゃ。
けっこうなことじゃのう。
みんなにこにこしとった。
機械いじりの得意な明石さんが頑張ってくれたお陰で船の調子がようなったと、漁師たちの評判もえかった。
明石さんを誉めたら、なんでか知らんけど鳳翔さんや間宮さんや大淀さんや吹雪ちゃ

んや北上さんらからようけ怒られてしもうた。
どげえしてええもんかようわからんけえ、頭を撫で撫でしてあげたらなんとかなった。
おなごはむずかしいのう。
日曜日は、新一も大和さんと共に連合艦隊で船出するそうじゃ。
大和さんが大興奮しとったのう。
新一がおらんかったら冷静沈着なんじゃけど、新一を見かけるともうなんかようわからん感じになってしもうとる。
明石さんに聞いてみたら、艦娘は相性のええ相手がおるとそうなるらしい。
ふうん。
蜜柑の収穫が始まったら、皮を干して混成酒の『エルキュール』を醸さんとおえんのう。
干し蜜柑も同時に作ってゆくか。
芋焼酎もでえぶん出来上がってきょうるし、葡萄酒の新酒を阿蘭陀人にやったらえらい喜ばれた。
なんでも今の時期の新酒はぬうぼうゆうて、欧州では縁起もんじゃそうな。
そげえに喜ぶんなら、と思うて何本か酒をやったらずいぶんと感謝された。

夕方仕事が終わった後で独り芋焼酎を蜜柑の搾り汁で割って呑んどったら、何名もの艦娘から絡まれた。
仕方がねえけえ、みんなで呑んだ。
結局みんな酔っぱらって脱ぎだしてしもうて、翌朝大淀さんからなにも着とらんままむちゃくちゃ怒られた。
艦娘たちがワシをじろじろ見ようるけえ、居心地がでえれえ悪かった。
その夜の寝床で、何名もの艦娘からめちゃめちゃ責められてしもうた。

酒粕

この辺りでは珍しく雪の降った日に、県南にある複数の造り酒屋からぼっけえ量の酒粕をもろうた。

砦（とりで）じみたごっちい屋敷が出来たんと偶然合わせたようにくれたけえ、これでお祝いでもしようかのう。

世の中が平和になって増産に向かようるけえ、これはぎょうさん酒を醸した残滓（ざんし）じゃな。

岡山県にもようけ造り酒屋があるけえ、ここ笠岡諸島の六門島（ろくもんとう）にも恩恵が来たわ。

なんともありがてえことじゃなあ。

酒粕の使い方はいろいろあるが、粕汁がええかな。

余ったら、甘酒でも作ろうかのう。

酒粕を初めて見る子も少なからずおって、そういう子たちにもこれは酒を搾った残り

なんじゃと教えとく。
鳳翔さんや間宮さんといった料理上手の娘たちに酒粕を渡し、ワシは味噌の仕込みに入った。
蔵で醸しとる芋焼酎や蜜柑の混成酒の具合を確かめながら、酒の微かな匂いが辺りに漂っとるのを嬉しゅう思う。
みんな喜んでくれるとええなあ。
ワシが作る甘酒を呑みたいゆう希望者は、思うた以上に多かった。
大和さんに後ろから抱き抱えられた甥の新一を助手にして、板状の酒粕を細こうちぎりつつ大鍋に投入してゆく。
井戸水を加えながら掻き混ぜ、火を調整しながらゆっくりゆっくり溶かしていった。
明け方から朝方にかけて降った雪は既に溶けきっとって、酒粕も鍋の中で形を失っていきょうる。
大和さん、顔があけえけど大丈夫じゃろうか？
なんか、ハアハアとようるし。
熱でもあるんじゃなかろうか？
気になったんで、聞いてみた。
「大和さん、具合がわりいんなら、休んだ方がええんじゃねえんか？」

「え？　あ、えと、その、大和は大丈夫です！」
「じゃけど、あんたさん、鼻血を出しとるが。」
「こ、これは、その、単なるオイル漏れです！」
「そげなか。」
「そげです！」
なら、ええか。

新築祝いの宴（うたげ）は始めの内、なごやかな雰囲気じゃった。
流石は皆元軍隊におっただけのことはあるなあ、と感心しとった。
じゃが。
甘酒をふるもうた時から、なんとも怪しくなってしもうたんじゃ。
発端は駆逐艦の子たちじゃった。
吹雪ちゃんがぺろんと服を脱いでしもうて、他の子はもぺろんぺろんとやってしもうた。
おまけに止めてもらおう思うた北上さんも服をぽろんぽろんと脱いでしもたし、大人な雰囲気の子たちが次々風呂場へでも行くかのような姿になってしもうた。
そげんに度数がたこうはねえ筈なのに、これはしもうたことをしたのう。

ワシは収拾を図ろうと思うたが、娘たちにこうもしがみつかれてしもうてはどうにもならんがな。

おお！

長門さんが立ち上がってくれた。

これで少しは状況がようなろう。

「たまにはこうして破目を外すのも悪くはないだろう。長門の名に於いて、今夜は無礼講を許す。存分に楽しむがいい。」

おうっ！　と叫んで新たに産まれたままの姿に変化してゆく子がある。

おえんがな、長門さん。

……酔っとるんか？

新一が肌色の塊にもみくちゃにされとる。

なんとかせにゃおえんとは思うが、多勢に無勢じゃが。

吹雪ちゃん、そげえなことをここでしちゃおえん！

鳳翔さんに間宮さんに他の子たちもわやしたらおえん！

結局、その夜のワシは何名もの娘っ子たちにもみくちゃにされてしもうた。

抹茶

春の朝。
まだ日も昇らぬ時間。
冷涼な空気が島を包み込む中、一人の中年男が海を眺めていた。
心地よくも冷たくさえ感じる風が彼をやわらかくも執拗に撫で回す。
昨晩の応酬が如くに。
男は、島に住む美しい娘たちの食糧供給に思いを馳せた。
最初はどうなることかと思われたが、やればなんとかなるものだ。
水資源が豊かだったのが、ひとつの幸いだと彼は思った。
懸念だった生活のための住居は完成したモノを見るとまるで城か要塞だが、気にしない方が賢明かも知れない。
島に住む存在が爆発的に増加したため、働き手の輸出は日常業務のひとつである。
スイスの傭兵のように。
実際、現在半分程の娘たちが出稼ぎで奮闘している。

身元をこっそり隠しながら。
戦後の混乱期は、それを容易に可能ならしめていた。
猟。
漁。
農業。
開墾。
建設。
その他。
新たな生き甲斐を見つけた娘たちは、戦争を生き延びた喜びと新たな方向性の入手という双輪がためにやる気満々であった。

彼は不意に、彼女たちへ抹茶を振る舞おうと思い立つ。
岡山県はお茶の産地としても優秀で、高級茶葉の生産もしている程だ。
その産地の内のある茶園から、彼らは抹茶を貰えることになっていた。
それは純粋な好意。
ありがたいことだ。
菓子をあの娘に作ってもらわねば、と男は考えた。

不意に、なにやら気配を感じる。
振り返ると、そこには数名の娘。
微笑むは人に在らざるものたち。
彼女たちは艦娘。
海を戦場として、深海棲艦との激闘をくぐり抜けてきた猛者たち。
まさに勇者たち。
人と魔の戦いは終わった。
確かに、それは終わった。
複数の影が一つの影に寄り添いながら、島の道を動いてゆく。
それは時折、姿を変えながら。

岡山県笠岡市の笠岡諸島。
その島々の中にある、六門島（ろくもんとう）。
ワシは慌ただしい雰囲気の中、大量の抹茶を受け取る。
石臼で挽かれた茶は、香り豊かに辺りを満たしてゆく。
茶箱を持ってきた男は受領に付き合うてくれた大淀さんや間宮さんを見て、ほうけた顔をしょうる。

まあ、いずれ菖蒲（あやめ）か杜若（かきつばた）じゃけえの。
抹茶を飲むのに使う器じゃが、地元の備前焼の工房が善意で商いにならんもんをくれたんは大きい。
ありがてえことじゃ。
てきぱきとお茶の準備が進む。
終わったら、皆でお茶の時間。
天気がええけえ、野外で野点（のだて）じゃ。
「これがニッポンのティータイムデース！」
巫女服を着た娘さんが、海外の子たちになにやら説明しょうる。
ええことじゃ。
先ず、出された菓子を全部食べる。
間宮さんの作った絶品の羊羹じゃ。
でえれえうめえのう。
次に器を回し、抹茶を飲み干す。
大体、こげえなんが作法らしい。
駆逐艦の子や海防艦の子は、苦手そうな感じにしとる子が多いのう。
「苦いから、口直しがいるねえ。」

そう言って、ふらりと北上さんがワシに近づいてきた。
何事じゃろうか？
いきなり唇を奪われて、ワシはびっくりしてしもうた。
「あっ、その手がありましたか！」
こちらを見とったらしい大和さんが、大きな声でそげなことをゆうた。
あんたさん、なによおんで。
大和さんの膝の上にいる甥の新一がちらりと見えたものの、すぐに大きなお姉さんたちに囲まれたけえ、甥っ子がどねえなっとるかようわからん。
「提督、口直しの時間です。」
大淀さんが真面目な顔でそうゆうと、ワシの手を引いて林に向かって歩きだした。
吹雪ちゃんや何人かの子たちも一緒じゃ。
林は丁度木陰を作っとって、すぐには見えんようにはなっとるようじゃ。
好奇心の強そうな子たちがこっそりついてきょうる。
あんまり激しいことはしちゃおえんのう。

射的

岡山県の中央よりやや北西にあるんは、城下町の高梁市（たかはしし）。
その昔、備中松山藩と呼ばれた地じゃ。
大石内蔵助ともゆかりのある場所じゃ。
お盆の時期に江戸時代から行われている夏祭りは、備中松山踊りとゆう。
水谷（みずのや）勝隆公によって提唱されたそれは、岡山県三大祭りの一つとして今も夏の風物詩となっとる。
ワシは甥っ子の新一と愉快な艦娘の面々及び島の商会や商店の人々を連れ、笠岡諸島の六門島（ろくもんとう）からポンポン船を経由して笠岡駅に到着。
山陽本線に乗って倉敷駅まで行き、そこから伯備線の汽車に乗り継いで高梁駅へ到着し、深夜まで踊りに踊って濃厚な夜を過ごしたのじゃった。
なんか知らんけど、警察官や目付きの鋭い男がようけえおったな。
艦娘の皆がキラキラと輝いとったけえ、とてもよかったと思った。

日常に帰れば、普段の生活が待っとる。
お盆を過ぎて暑さも一段落し、大和さんが新一を肩車しつつ畑仕事に精を出す日々。
ある日、島でも祭りをしたいと吹雪ちゃんや彼女の姉妹やなんか沢山の艦娘たちから請われてしもうた。
そげえにしたいんかのう。
もみくちゃにされて、参った参った。
新一と大和さんが木陰で和やかにサイダーを飲んどる。
お姉さん系の艦娘たちが、その周りで穏やかな表情をしとる。
新一もやるのう。
夕方、わけえ艦娘たちに囲まれる。
こげなんじゃ、逃げられやせんが。
「花火を上げましょう！」
「駆けっこをしようよ！」
「走るのだったら負けないよ！」
「いっちばーん！」
「ぱんぱかぱーん！」
「それじゃ運動会です。」

「いいじゃない。昼は運動会で夜は盆踊りにしてしまえば。」
「ねえ、提督。この島での伝統的な夏祭りは無いの？」
みなが一斉にわやわやようるけえ、なんかようわからん。
ん？
夏祭り？
この島で？
「そうじゃなあ。蔵の文献でも読んでみるか。」
「それでは不肖この大淀、お手伝い致します！」
ぬおおっ！
大淀さん、いつの間にワシの後ろにおったんかな！
驚くがな。
それに、そげなとこをもみもみしたらおえんがな。
蔵の中の古い文献を漁っとったら、だいぶん昔はお盆過ぎに夏祭りをしとったらしい。
江戸時代にはそれなりの規模でやっとったらしいが、人口の減少や伝承が薄れてゆく中でいつしか忘れ去られたようじゃ。
どうするかのう。

中でも射的が重要な位置にあって、昔は弓をつこうておったが、大正の頃にはコルク銃をつこうとったそうじゃ。

二丁見つかり、そういえば小さい頃に撃ったこともあったことを思い出した。

埃（ほこり）だらけな輪投げの道具も出てきたし、なんか蔵の中の艦娘がどんどん増えてきょうるの。

そげなとこをむにむにしたらおえんがな。

そうじゃなあ。

射的と的矢と輪投げと……メリケン製の綿菓子機も出てきたし、かき氷機も出てきた。

洒落者の爺さんの趣味かのう。

ようこげなものをこうたのう。

機械類は、頼めば明石さんと夕張さんが直してくれるじゃろ。

と思っとったら、いつの間にか明石さんと夕張さんがすぐそばにおって、道具類を全部持っていってくれた。

ワシをぺたぺた触る娘がおるけど、ワシはビリケンさんと違うぞ。

氷は大和さんや武蔵さんといったお姉さん系艦娘が作ってくれるゆうたけえ、任せとこう。

どうやって作るんかのう。
「乙女の秘密です。」と大和さんはゆうとったが、まあ、追及はせんどこう。
間宮さんが「私のを見ますか？」と赤い顔で聞いてきたんじゃがやめといた。
大淀さんと間宮さんもえらく張り切っとって、昼はみんなに試作品を食わせとったが、夜はワシが食われてしもうた。
まあ、それはどうでもええことじゃな。

よく晴れた風の強い日。
島の夏祭りが始まった。
紅白幕に応援団。
まさに運動会の様相じゃ。
赤組白組どんどこどん。
ドンドンと大砲みたいな音と共に、駆けっこしてゆく娘たち。
玉入れ綱引き徒競走。
お昼はみんなでお弁当。
みんなで仲よくお弁当。
戦う戦う娘たち。

キラキラ光る娘たち。
やれ行けそれ行けどんどんと。
最後は決戦川中島。
上杉武田の総力戦。
勝つも負けるもこの一戦。
行くはもののふ負けてはならじ。
激突激突大決戦。
接近接戦白兵戦。
さあさあ皆様ごろうじろ。

戦い終わって日が暮れて。
皆で勝敗分かち合う。
勝っても負けても恨みっこなしよ。
夜は盆踊りが待っているのだから。
踊ればぐんぐん仲が深まってゆく。
那珂ちゃんの歌に合わせてさあご一緒に。

見ごたえのある紅白戦じゃった。
さあ、全員で氷菓を喰らおうぞ。
前に作った葛をアイスキャンディにつこうてみたそうじゃが、なかなかの味じゃ。
溶けにくいのもええ点じゃと思う。
まさに皆の努力の結晶とゆうとこじゃし、もろうた果実の果汁も旨みを増す要因じゃ。
西瓜、葡萄、白桃、それにすもも。
爽やかな夏の味わいはうめえのう。
日が傾き、夜が近づく。
赤紫に染まる空に笑顔が沢山。
夏祭り夜の部、開幕じゃ。
櫓（やぐら）で太鼓がどんどこどん。
おかっぱ頭の娘さんや長い髪の娘さんが勢いよく太鼓を叩きょうる。
綿菓子機は大和さんに抱っこされた新一が担当し、恥ずかしながらもきちんとやっとる。
輪投げも的矢も盛況じゃ。
一番人気は射的。

行列が出来とる。
蔵に二丁あったコルク銃は何故か六丁に増えとって、パンパン艦娘の皆が真剣な顔で撃っとった。
まるで兵隊さんみたいじゃ。
……ああ、皆兵隊さんじゃったの。
コルクの形が形じゃからそげえに当たらん感じもするんじゃが、よう当たりょうる。
ワシもやってみたが、全然当たりゃあせんが。
「提督のここの大砲はよく当たるから、大丈夫だよ。」
おうふ。
女の子がそげなところをぱんぱん気軽に叩いたらおえんがな。
注意したら、娘はごめんねーと言いながらニヤリと嗤ようる。
その直後、夜空に大輪の花が咲いた。

【註釈】
ようけえ→沢山、多く
そげえに→そんなに

ようる→言っている
せんどこう→しないでおこう
そげな→そんな
おえん→駄目、いけない
こげな→このような
こうた→買った
もろうた→もらった